

雅遊漫録

五

特 7  
4  
332

藤大郎



国立国会図書館 タイトル『雅遊漫録』 請求記号 特7-332

ガラス使用



特7-332



雅遊漫録卷之六目錄

○巧結正式 二十七様

相生結

眞蜻蛉

貝桶 雌雄二

諸結

片結 左右二

叶結

兔頭結

上卷結

東結

掛緒結



雅遊漫録卷之六

目錄

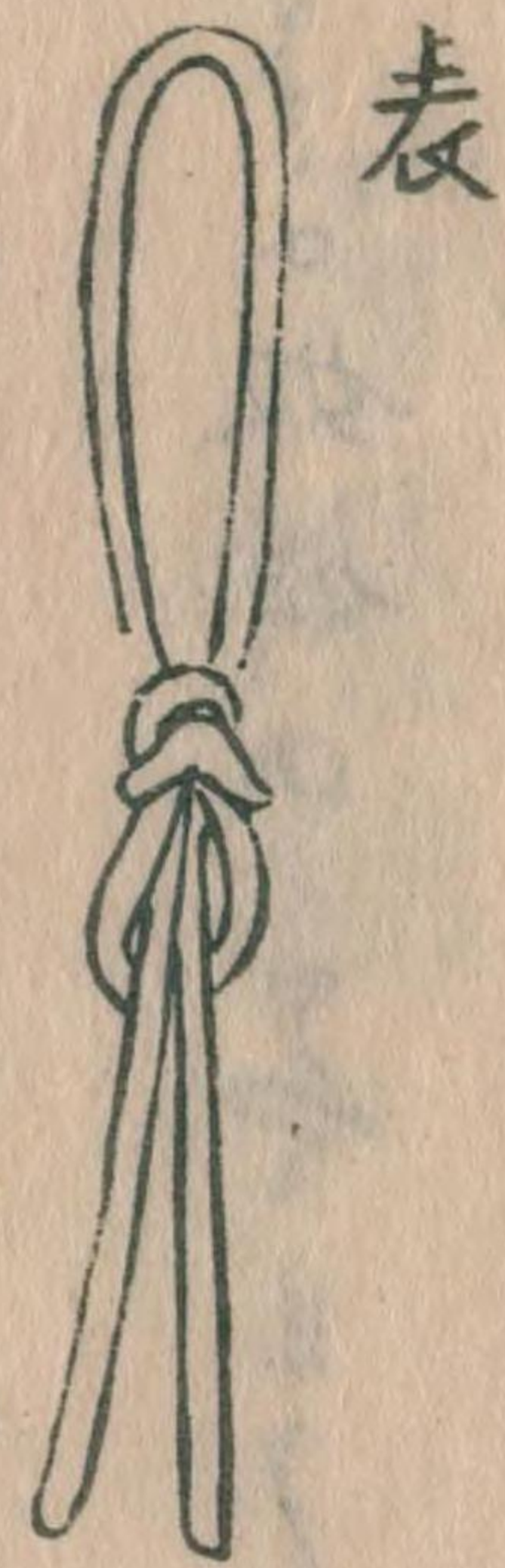








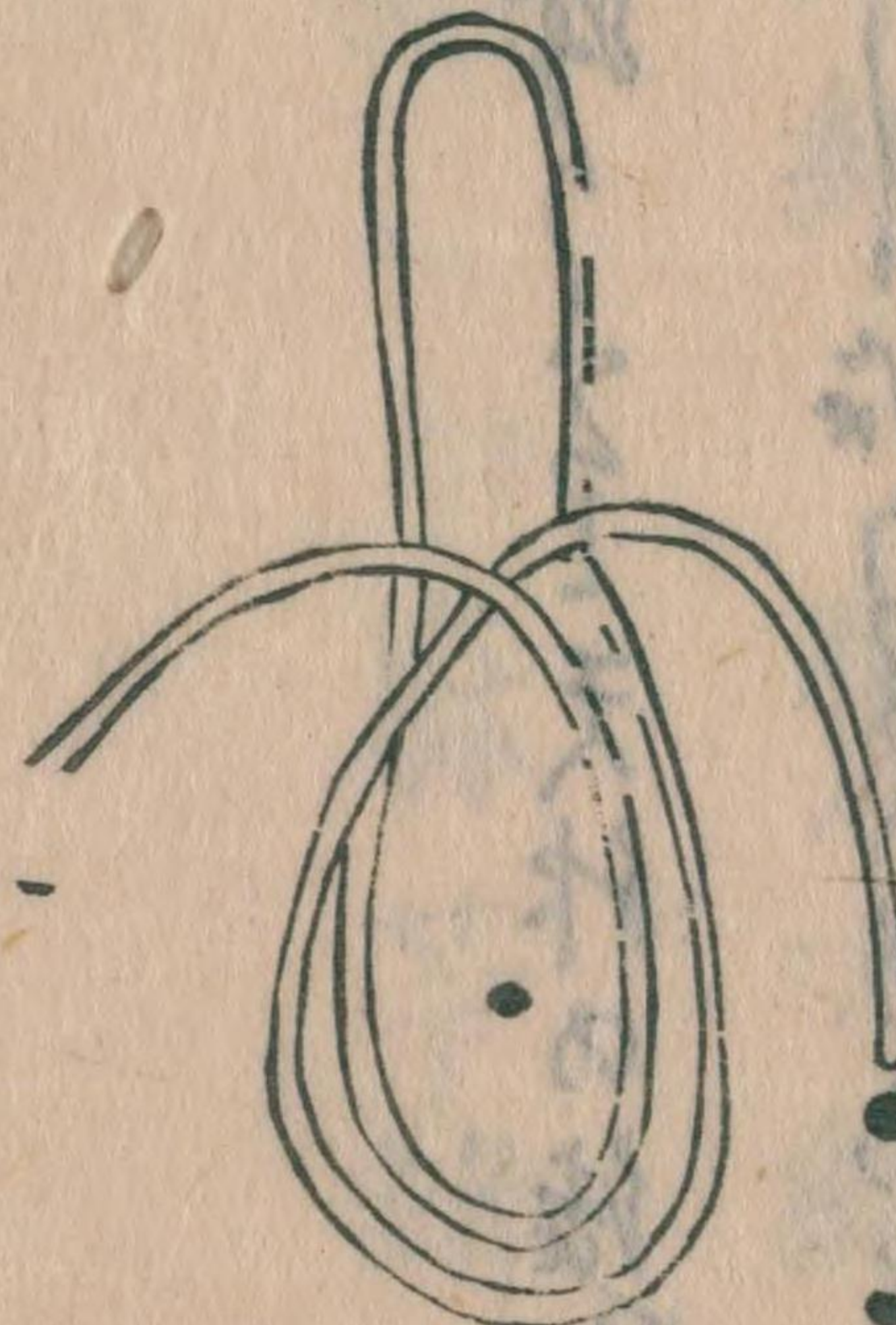
相生結



結やうたの糸の

ふしよ結てあむるのむしひらけハ

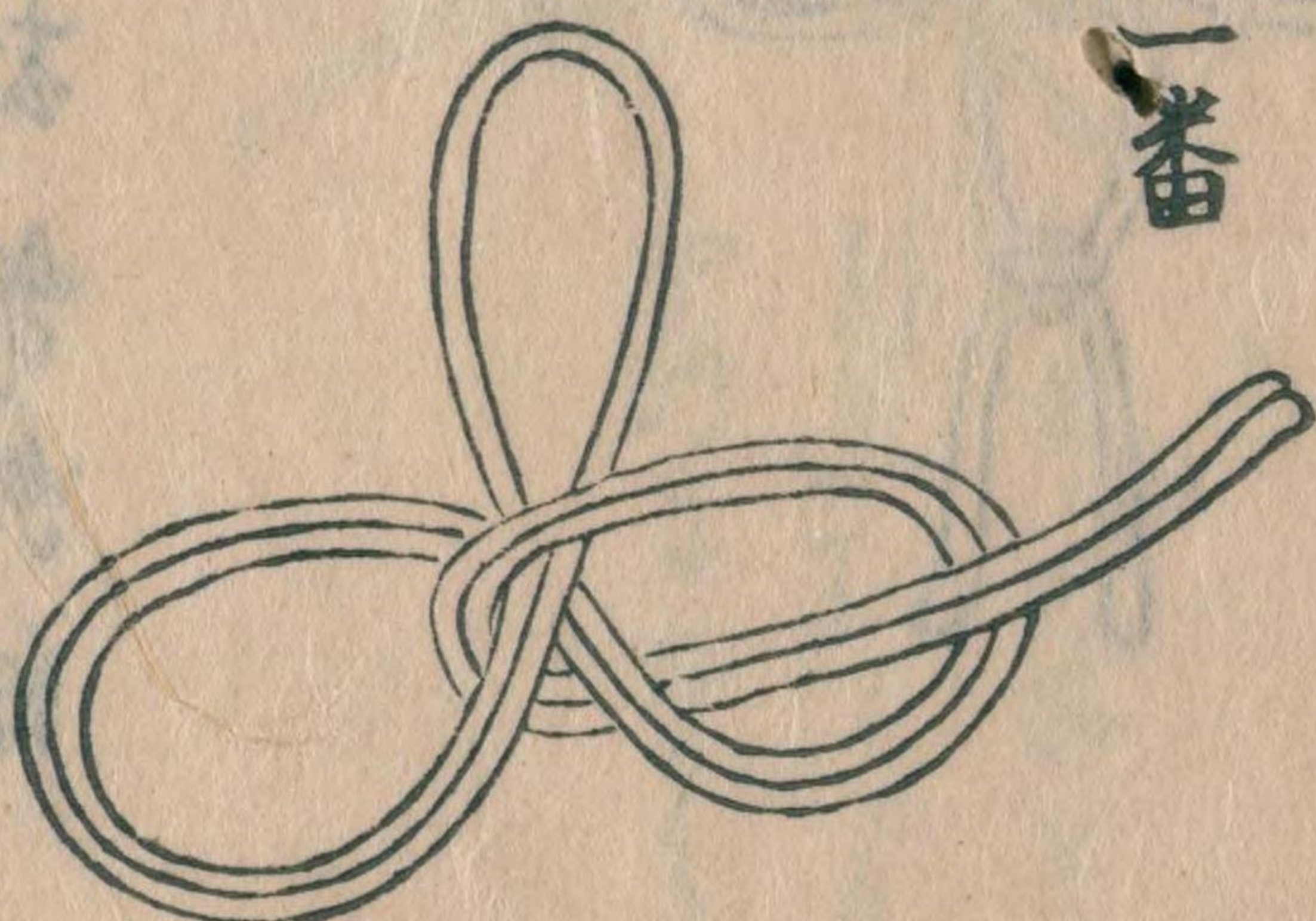
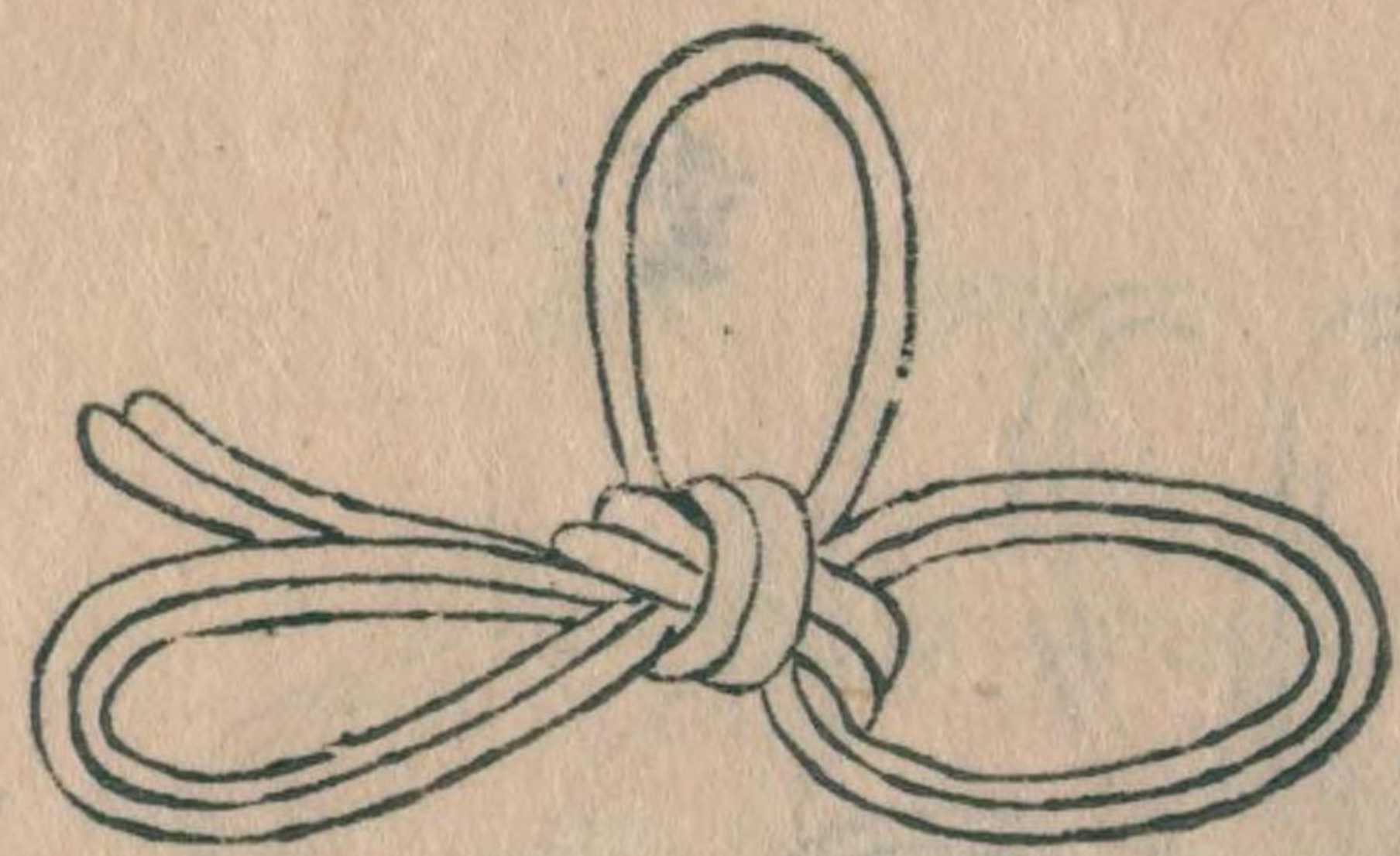
下の糸の



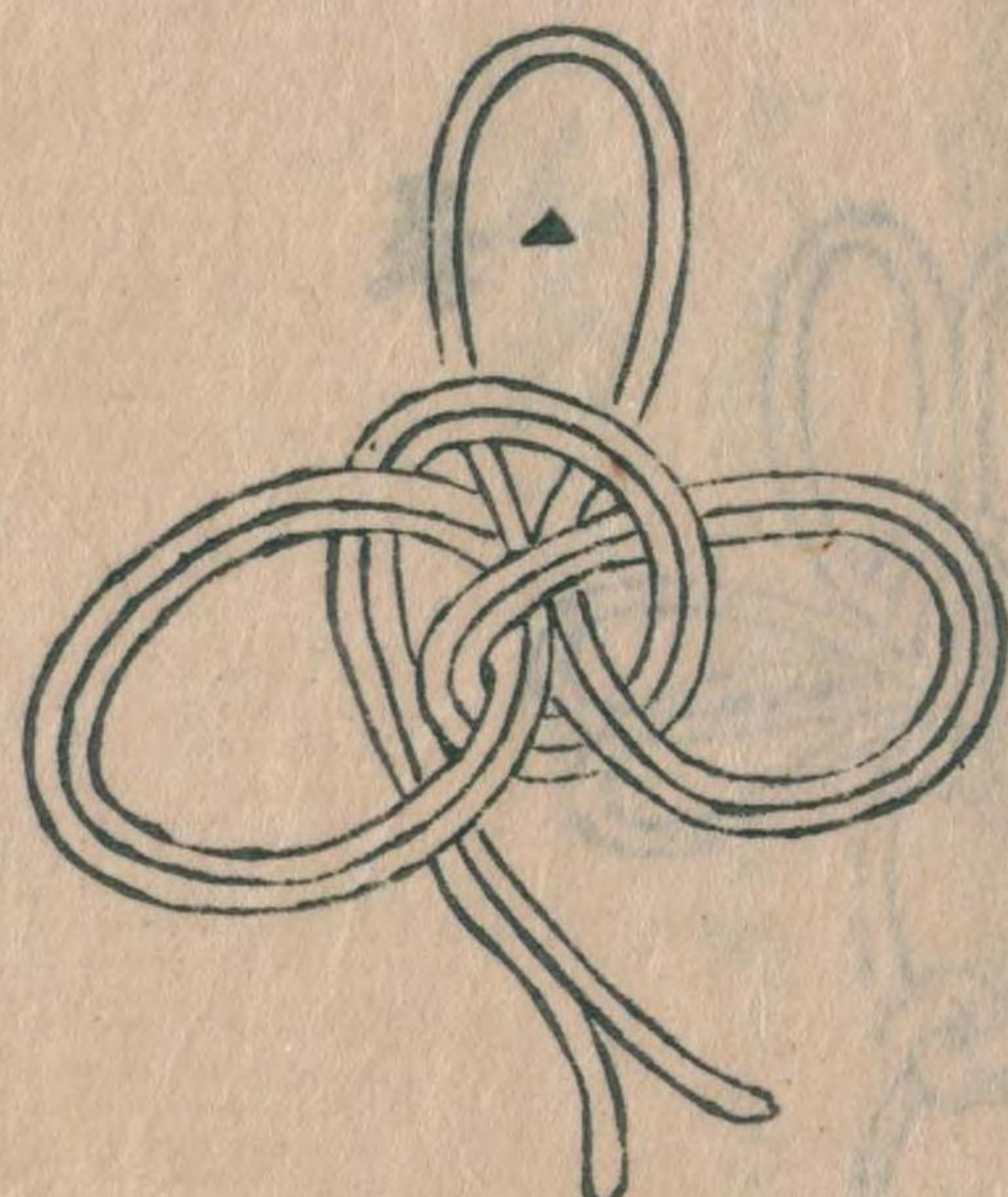
いへん裏くま  
り中の元へ  
あむるあむり  
あむるあむり  
あむるあむり

真々結

一番



二番

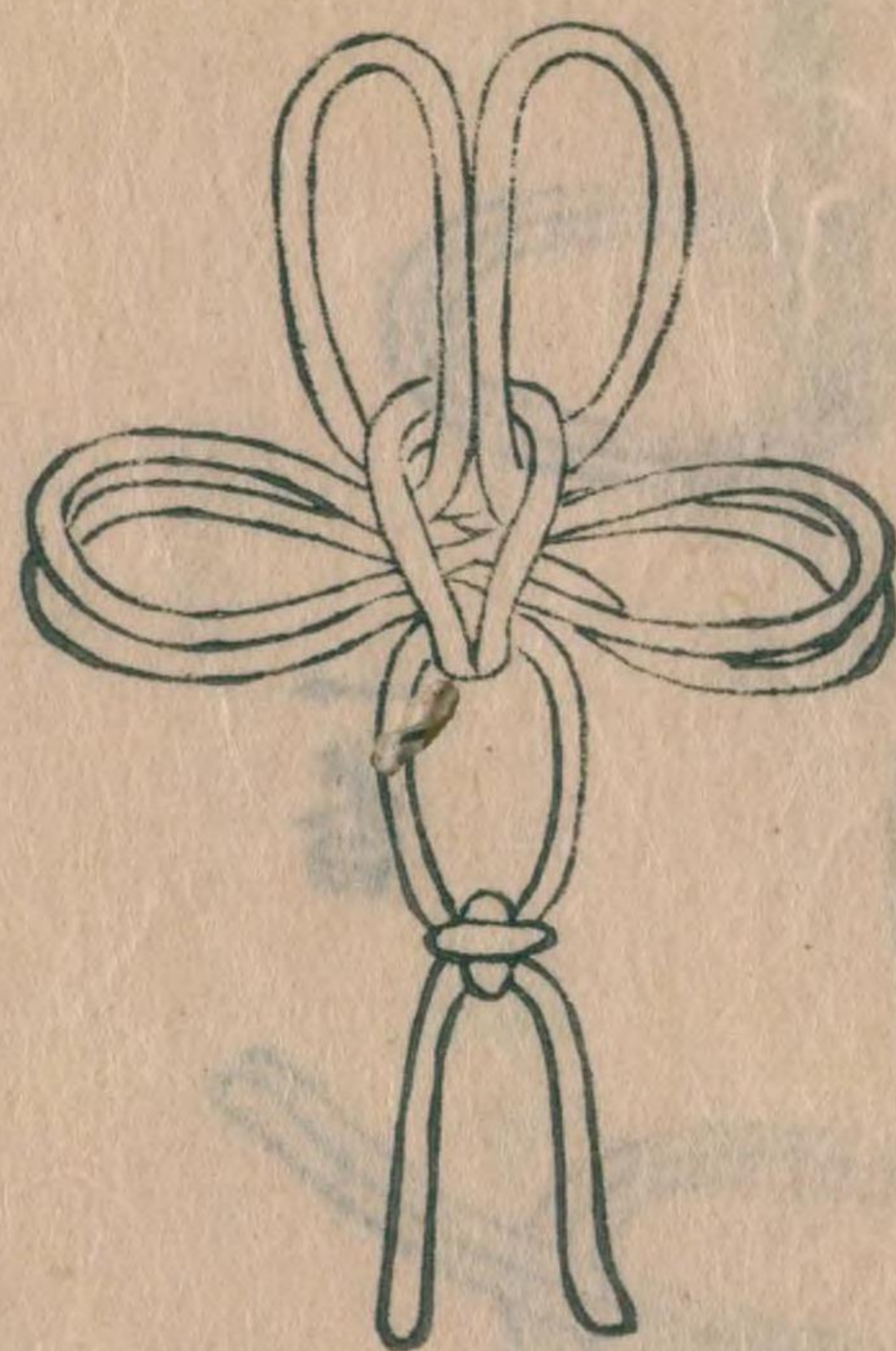


いへんの元へ  
あむるあむる  
あむるあむる  
あむるあむる

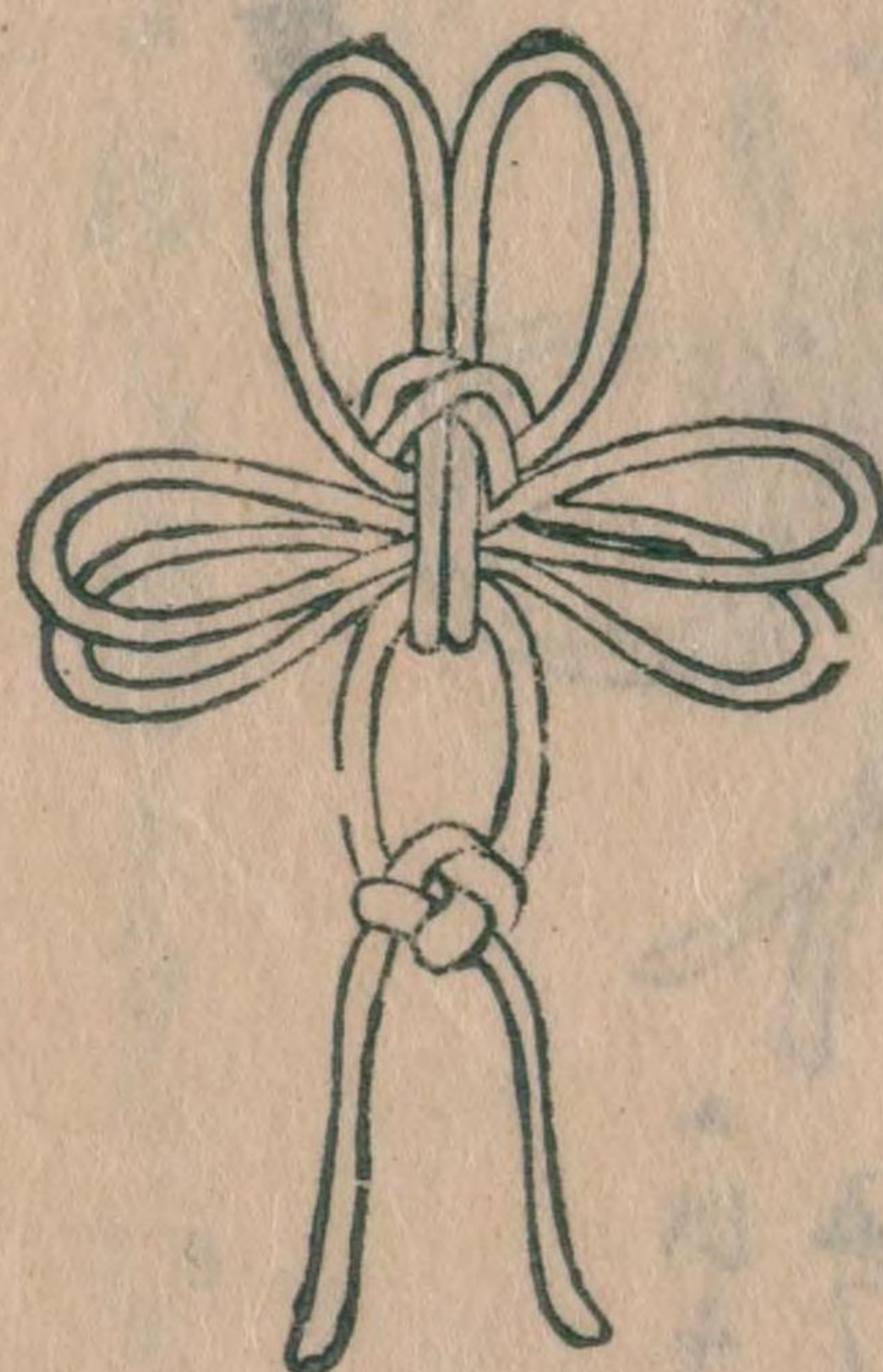


貝桶雄髯鈴結

裏



表

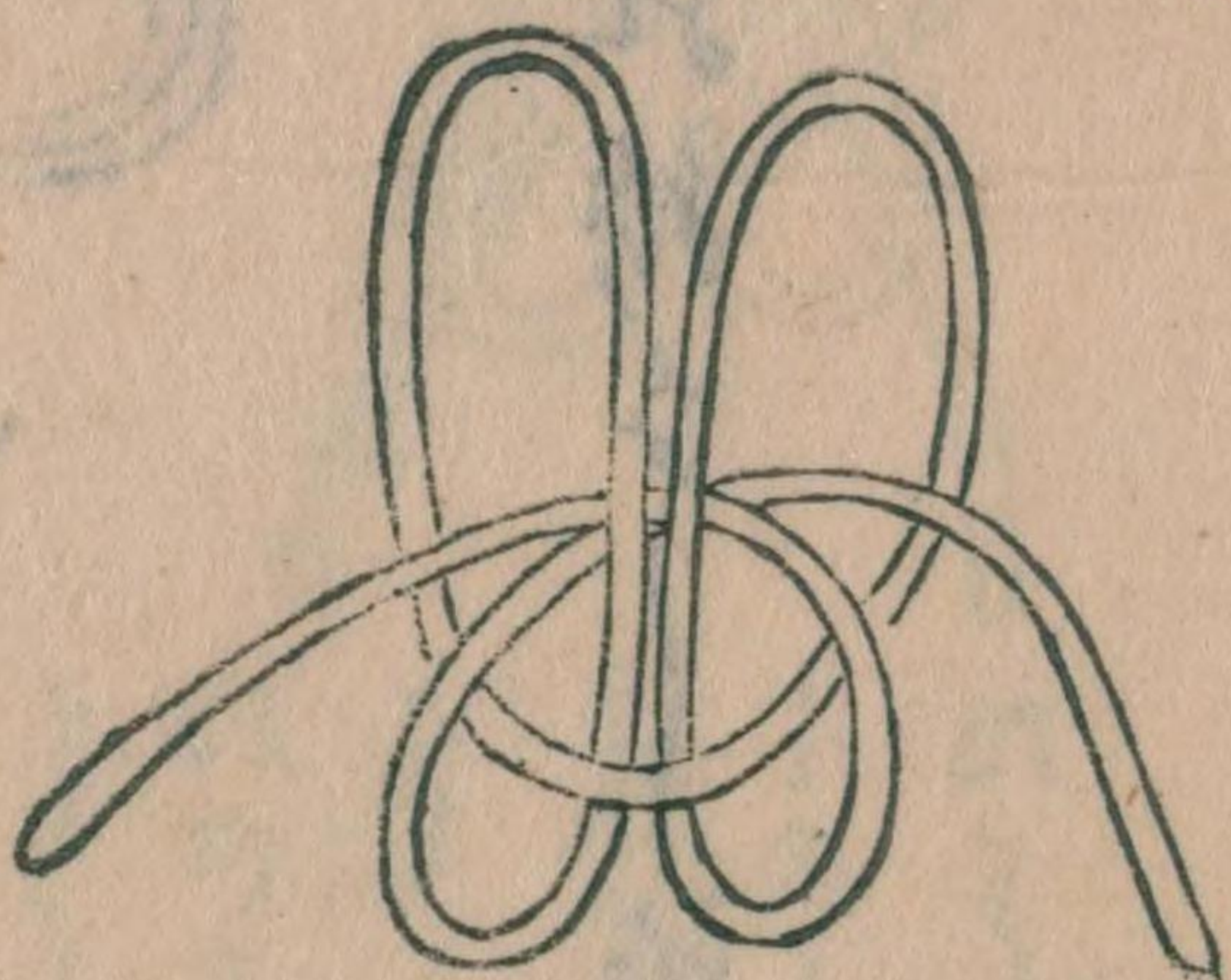


右に結なくひしき結を時ハ下の叶結を  
とより結をりむきひやりの図たの  
叶結ハあしとる

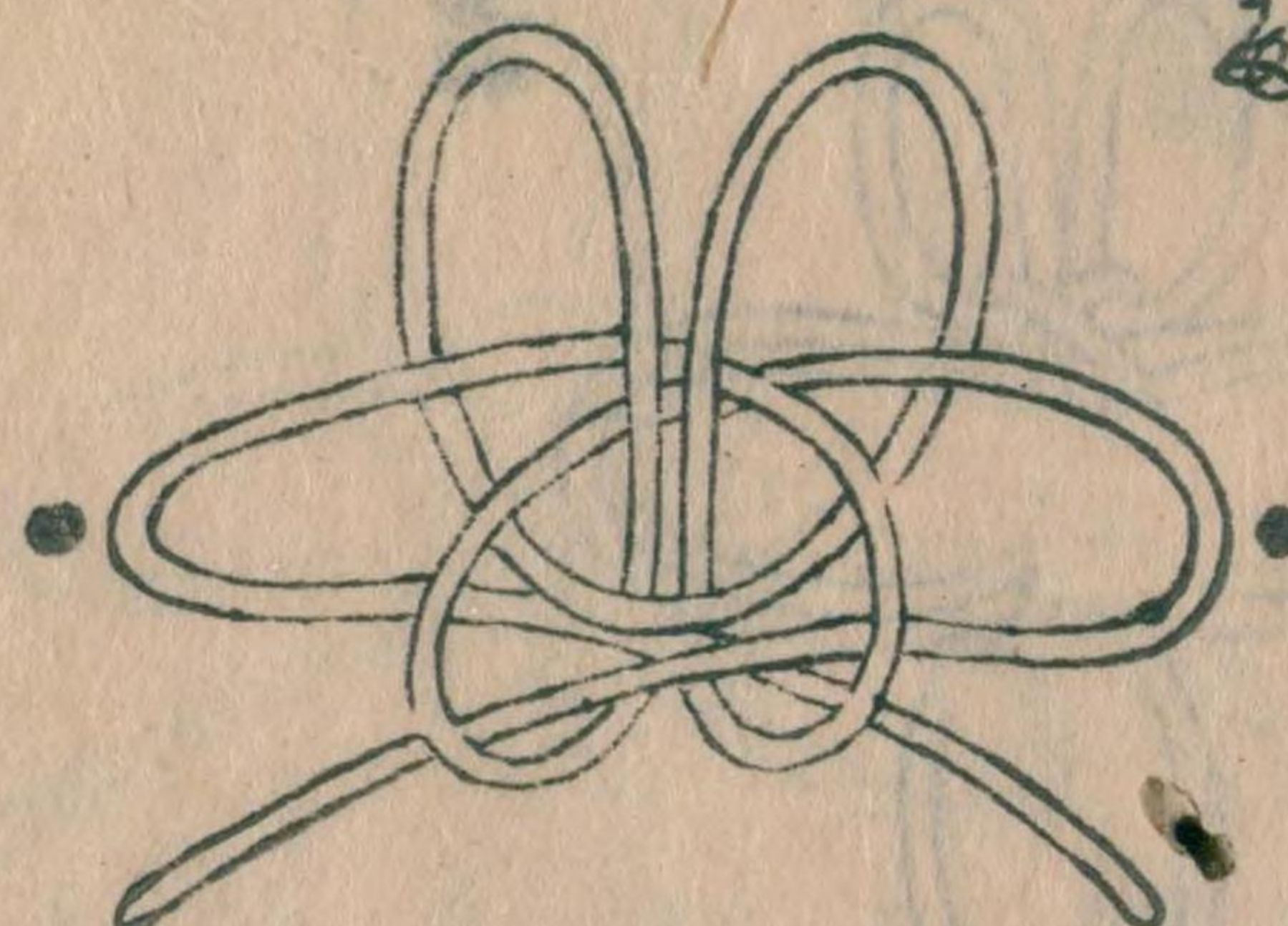
一  
表



二  
裏



三  
裏



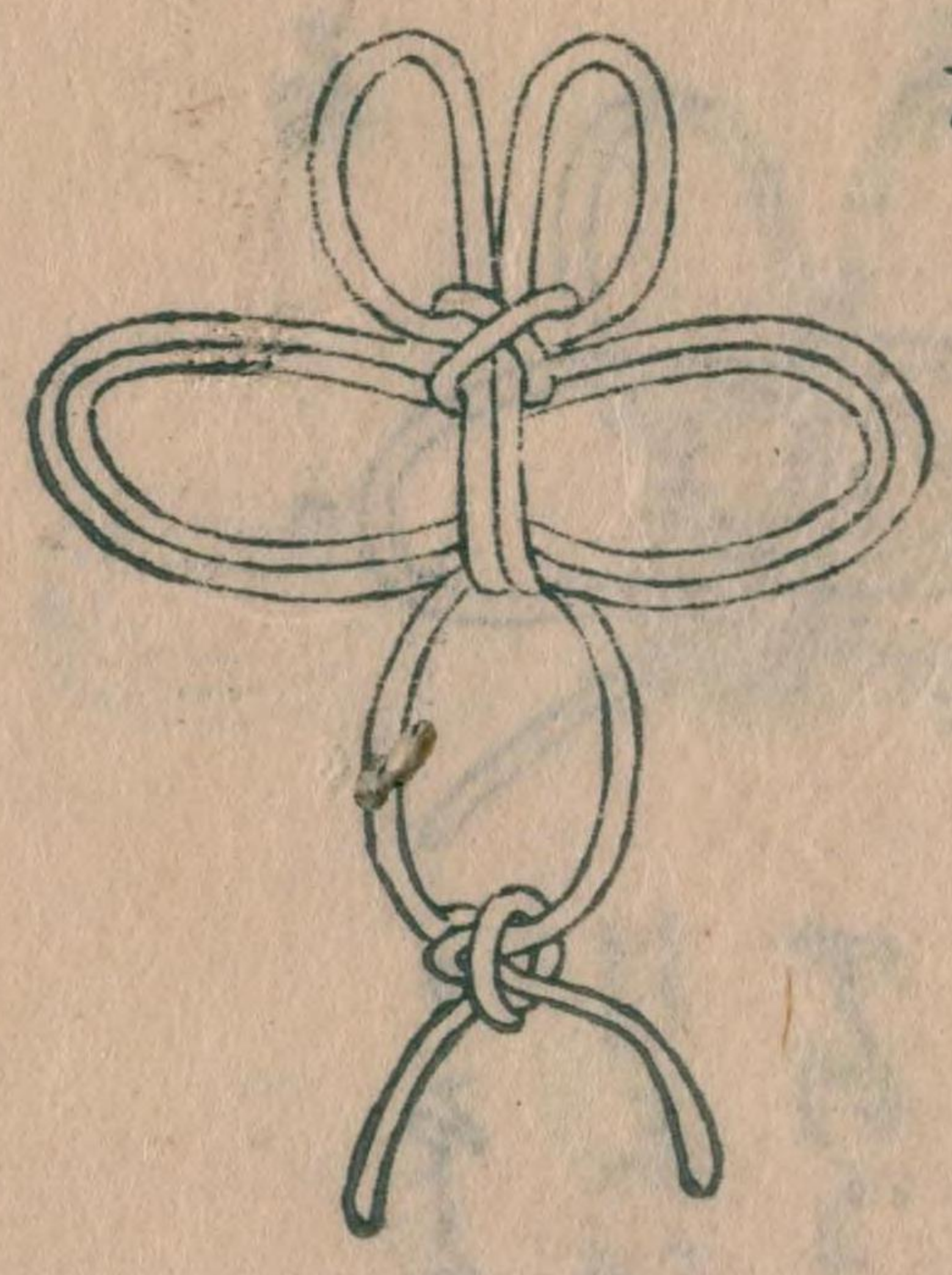
• 平の取と又まふしてあ方へやうちがひ  
りまむのやうちがひまむのやうちがひ  
あつたむとあつたむ



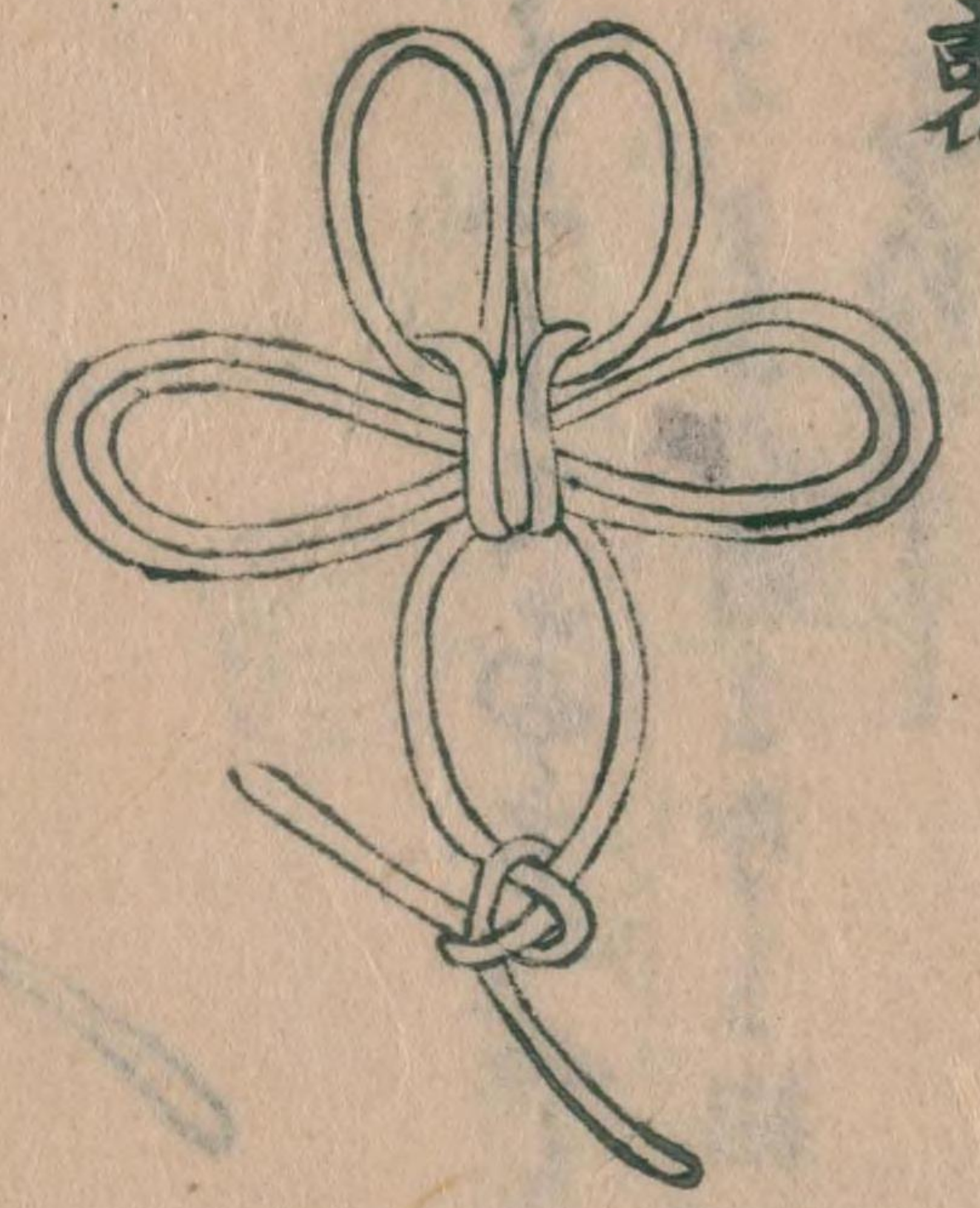


貝桶雄髻鈴結

表



裏

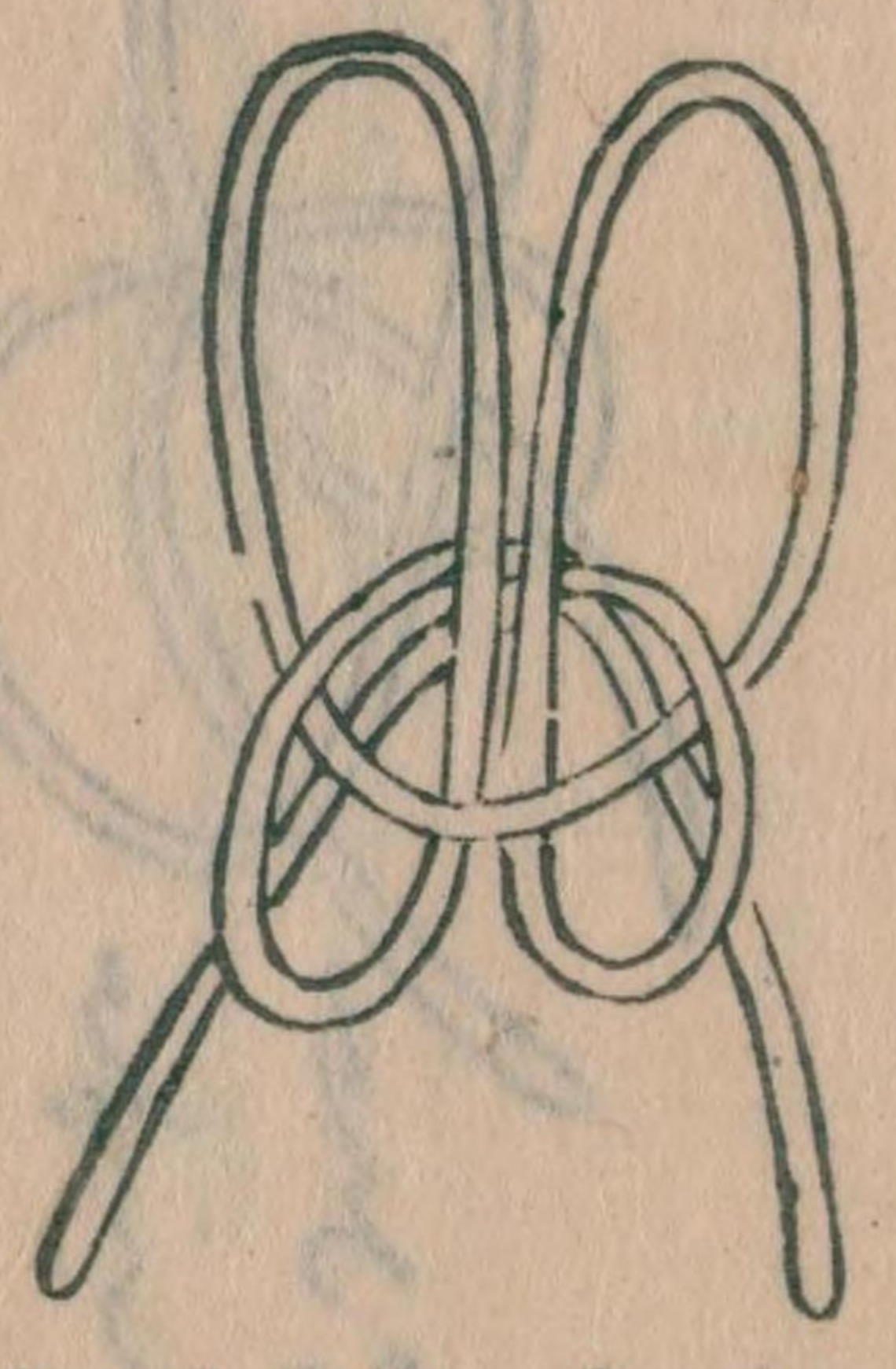


ちく結ありひくも結を舟ハバ結結さー結さーの  
畚をたのしー

一番

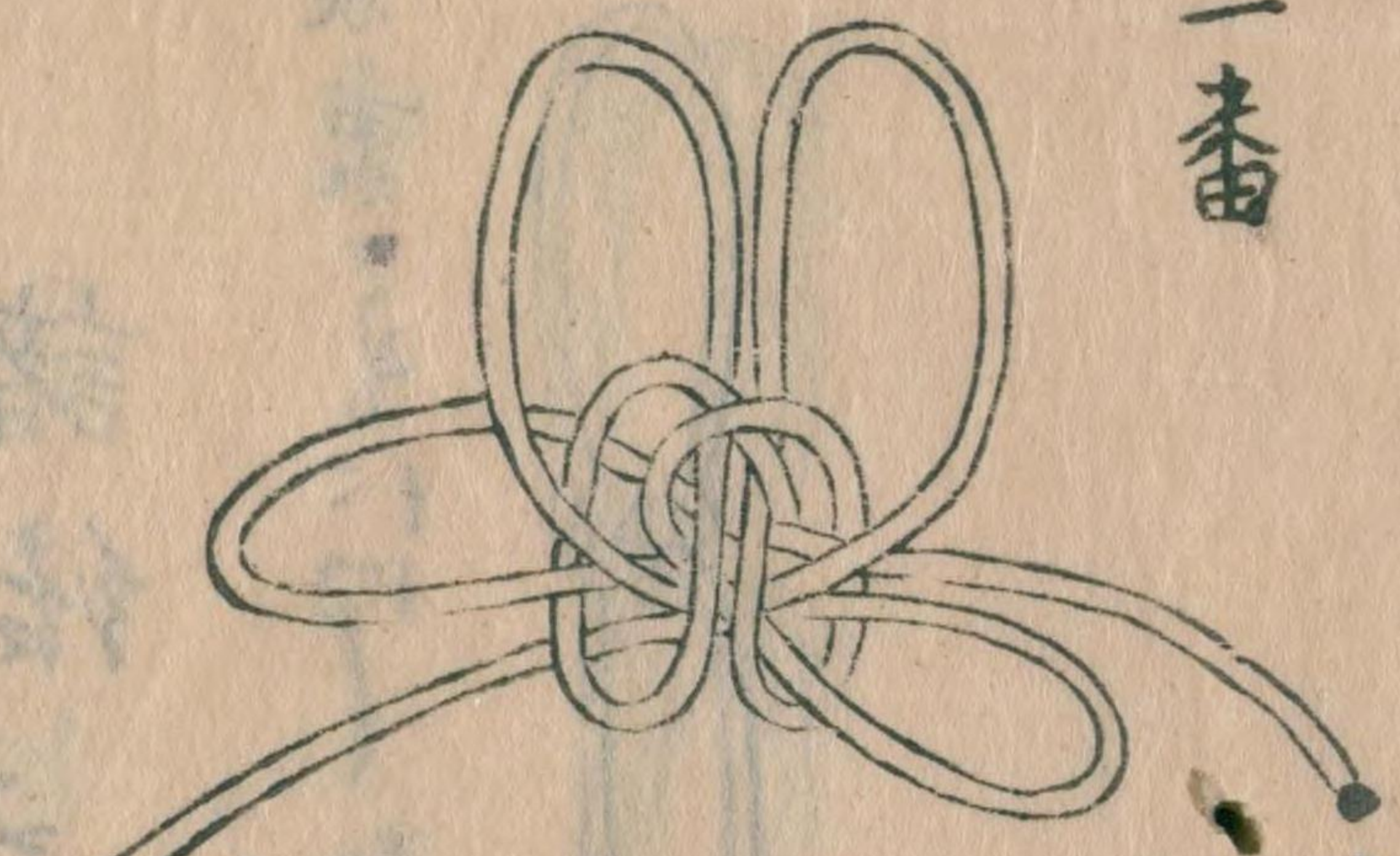


二番

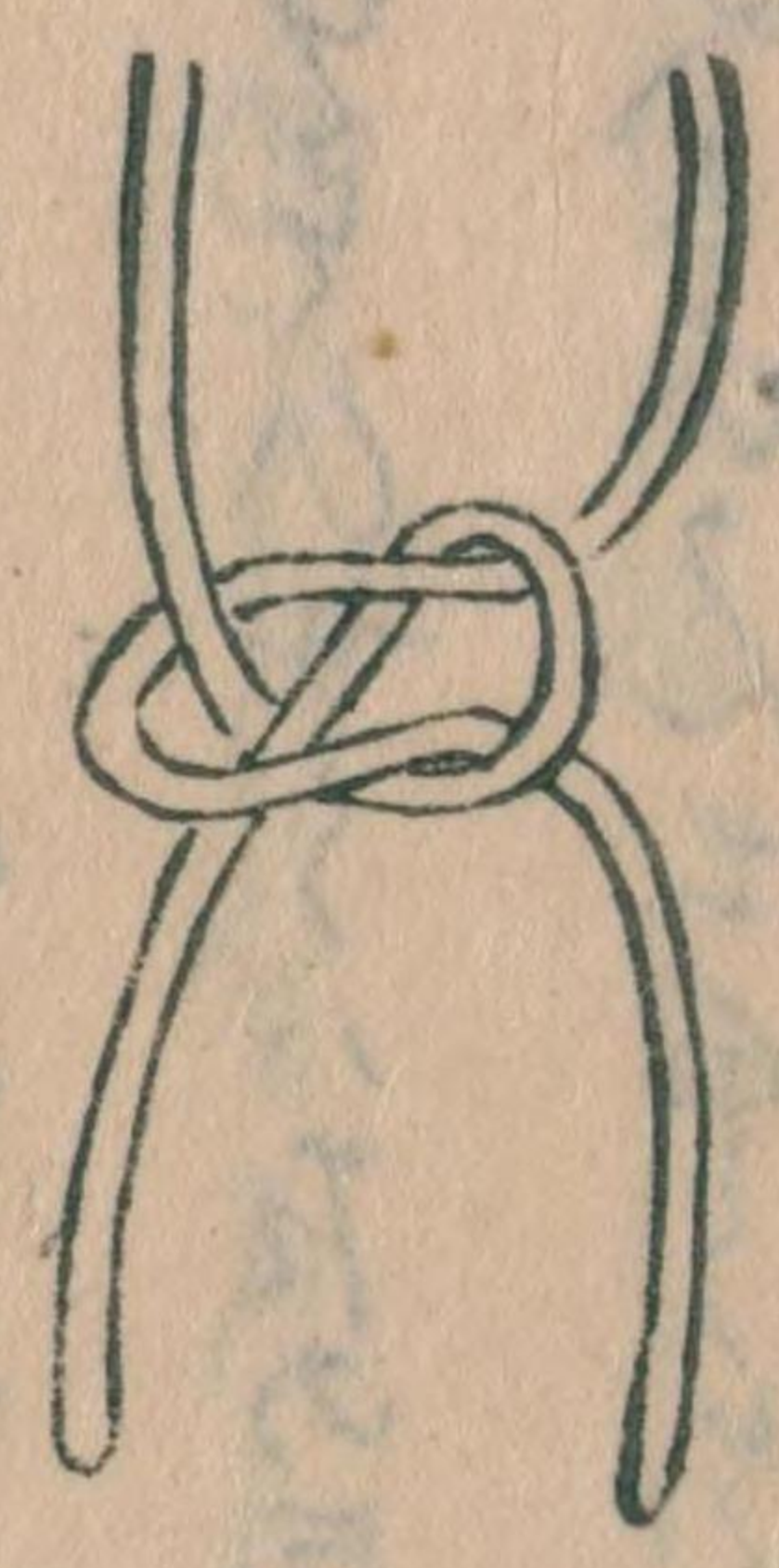


けくーと  
下のまき  
あまうり  
さーは  
此のまのど  
とーあ

二番



けくーと又まきー  
おはハなまのりよき  
こと川まむせはあさん  
が結さるのさうし結  
るトのまこととそ又  
結さるるトの圓の  
さー



下まの結くさる  
さー





諸結 又ふいふも云

表裏ともにて一取をよ



け結ハまじらなく長結敷

あふ結むきひやうハたの固

のしゝ又ふいふちやうん

さうこの神ちへいふあ結

一番



二番



さう結くちむに  
あふむきひとあふ

左片結

表



裏



結やけ圓のどく一此結ハまじら結の  
あふ結さう又つあふに付たさ結  
さうあうり







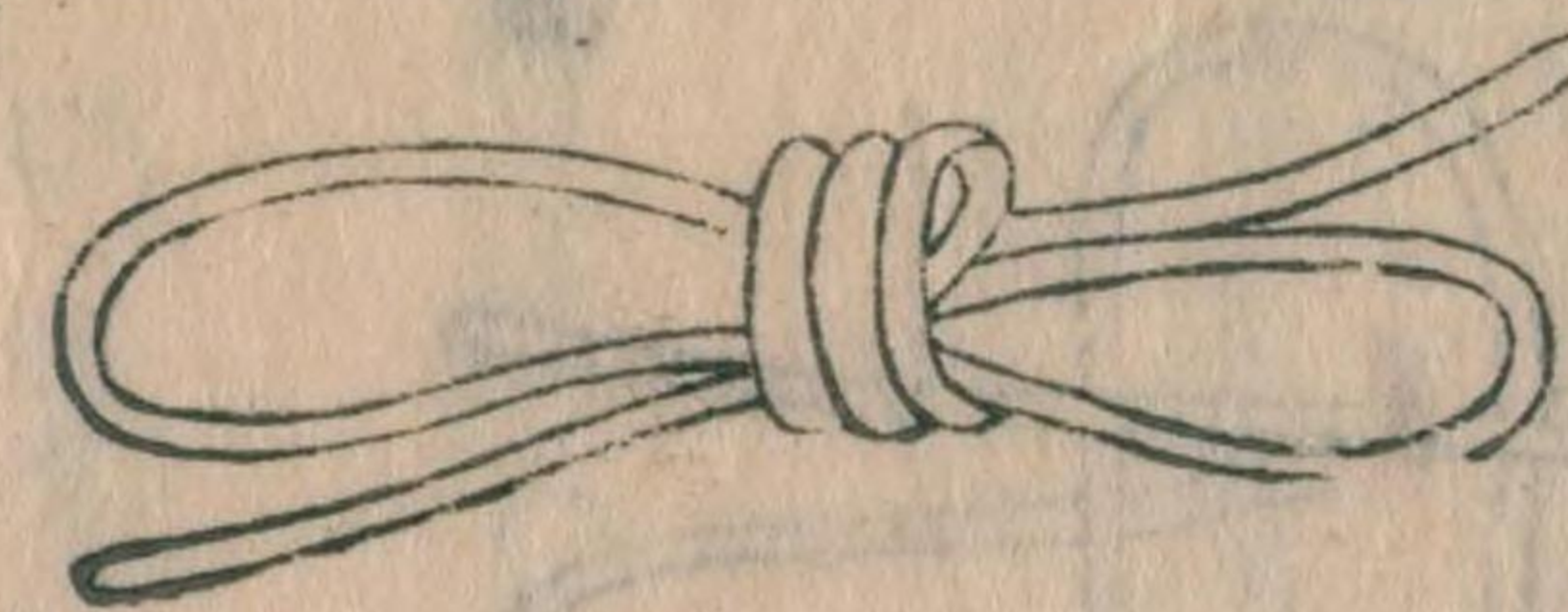






東結

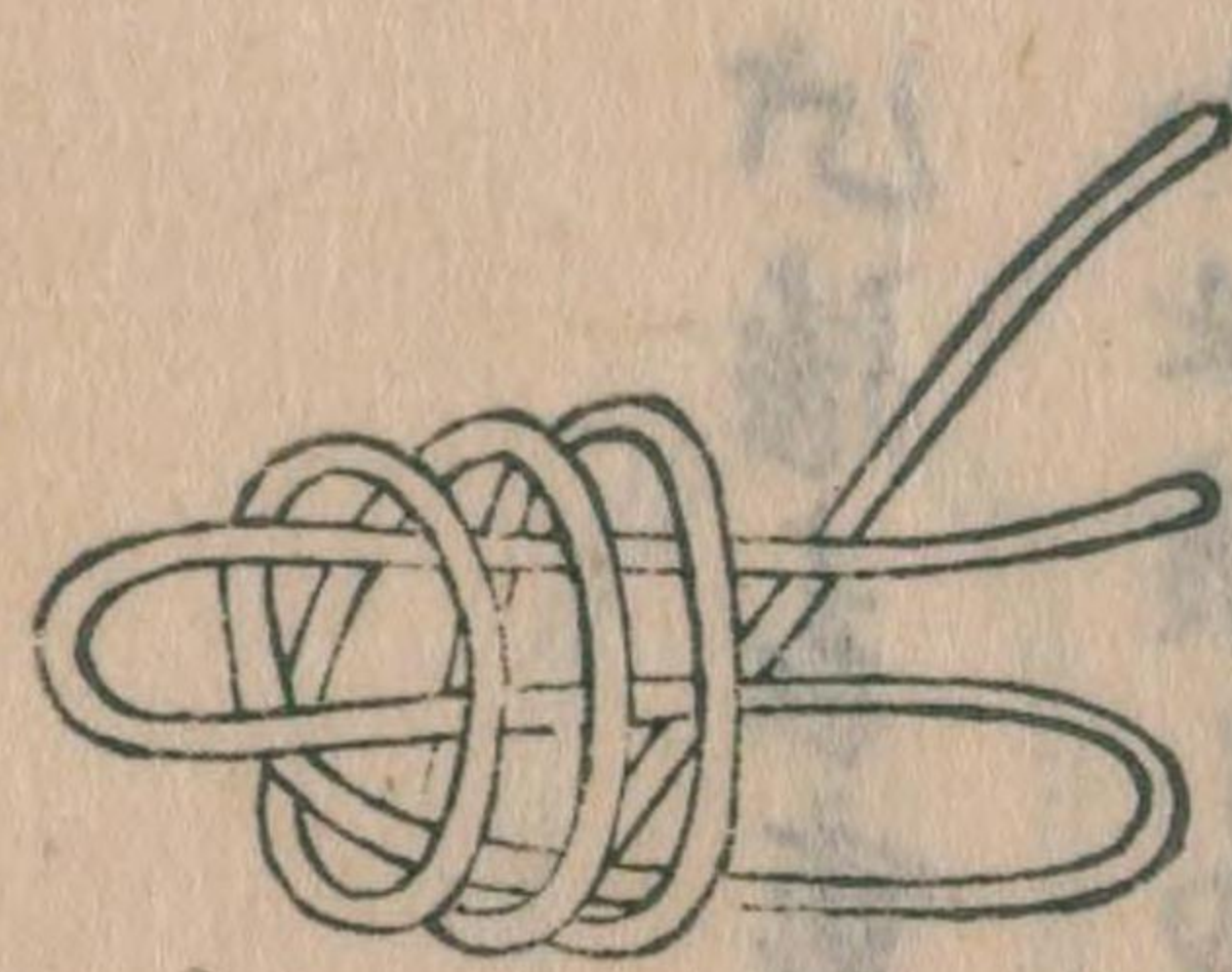
表裏口瓶



一番

此結几帳乃箱入結也  
たの号乃

二番



○此号のきんこ  
さうりーの半く  
たくりおとをくりよ  
まむるなり

烏帽子ひ緒結

表



裏



えうけ結やうた乃圖の

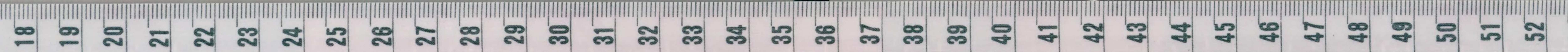
一番



二番

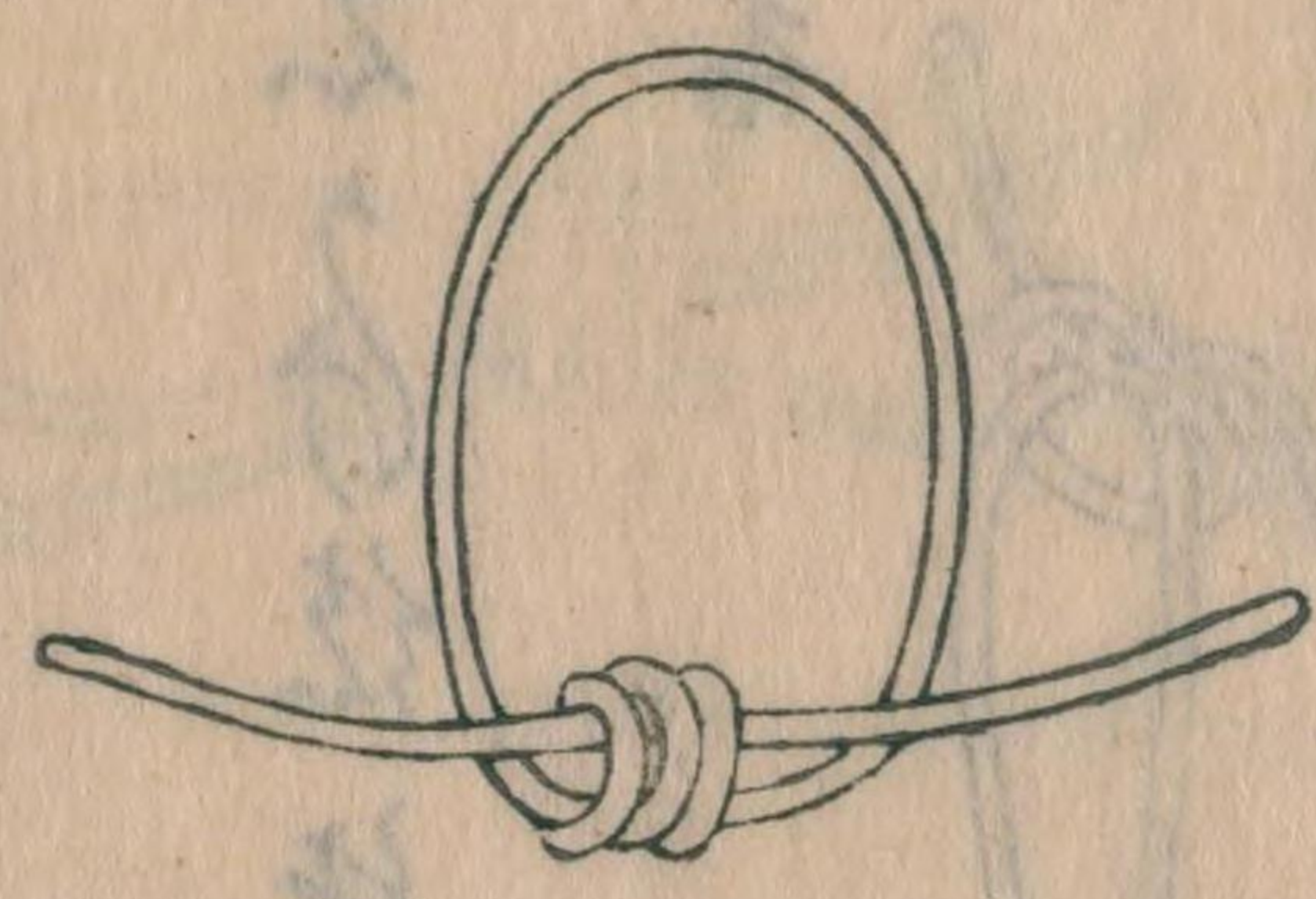


えうけ結やうた乃圖の  
結





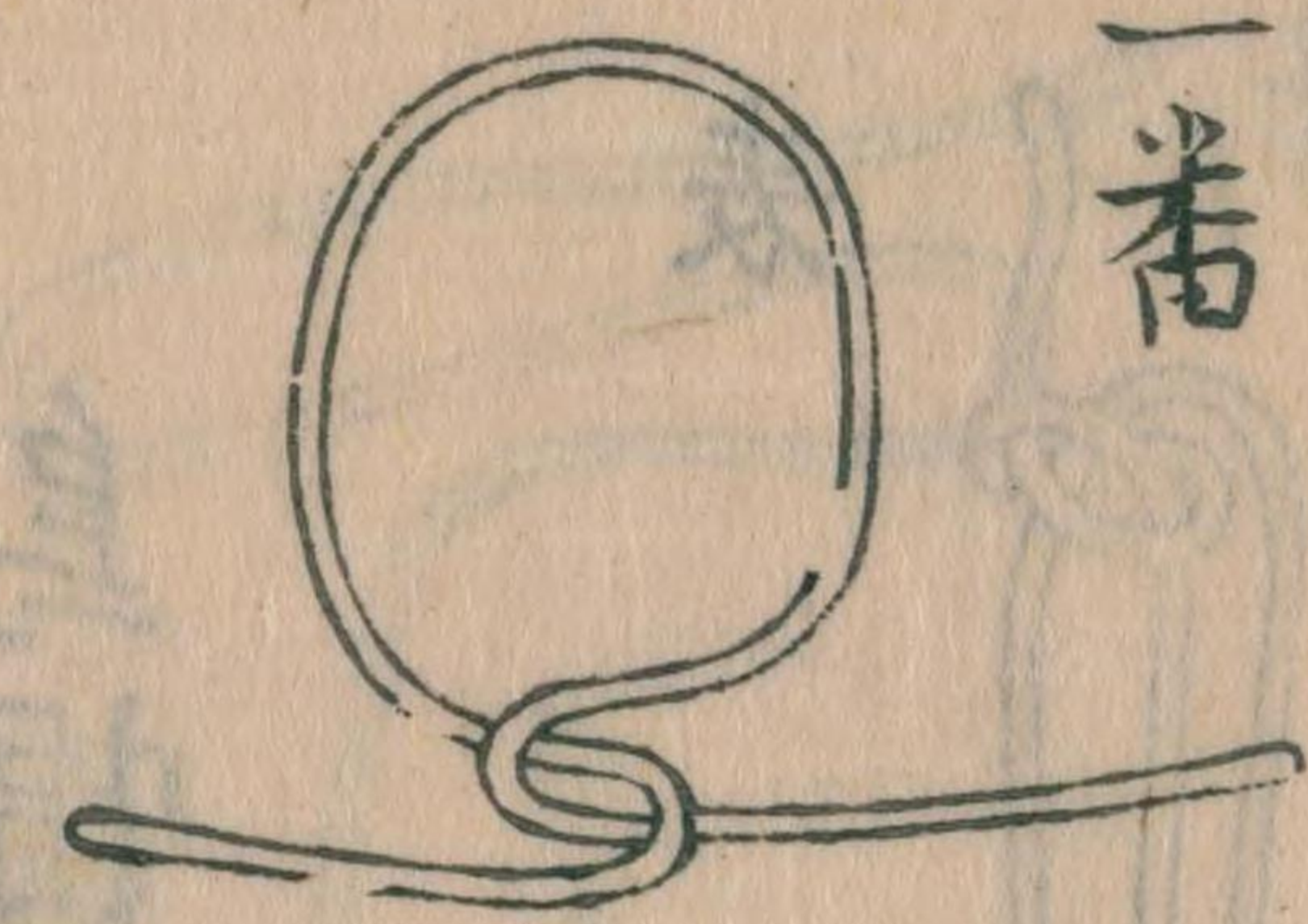
草寶珠結



又ありひ結とともそ人の兼<sup>年</sup>す  
この結とおもひ結とをせうとあり

結やうたの図は

一番



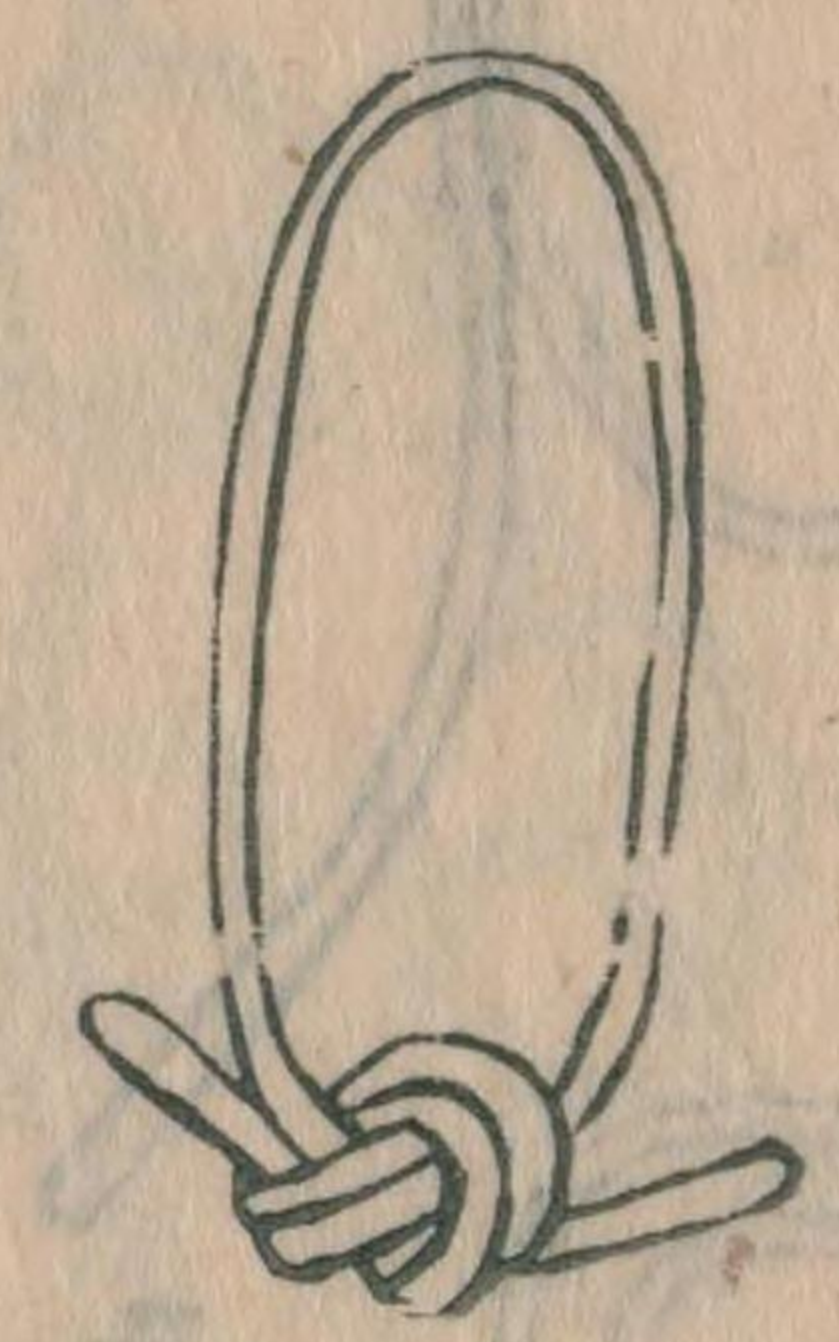
二番



け二番は果のうた  
冬ころまうい。ひ下のあ  
とたうたうたうたうた  
そらうとともひ結の宝珠  
結とあり

草寶珠結

平人の兼<sup>年</sup>すのありひ結

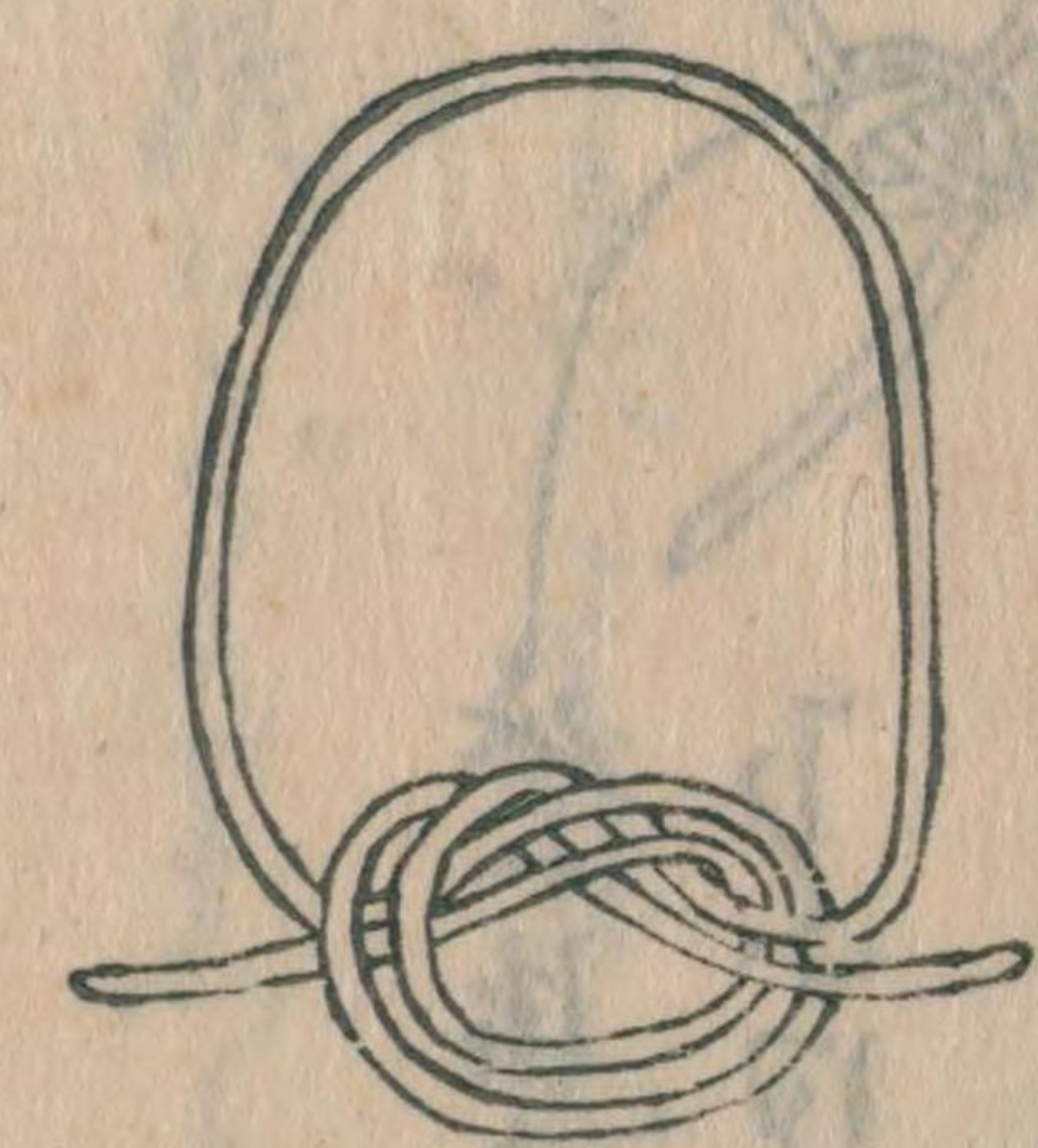


結やうたの図は

一番



二番



平人の兼<sup>年</sup>すのありひ結  
とたうたうたうたうた  
そらうとともひ結の宝珠  
結とあり













長編結



常のつくりともち法なり一結して向一  
ふふ二ふ三引ふのちと方成たの方一  
まふよ折向の短と方とまふく折りけ  
ちのりくまふく廻しためをくあふ結  
のりくま中の完へ五一ちれをくねこ  
ちむふ

鳥頭結



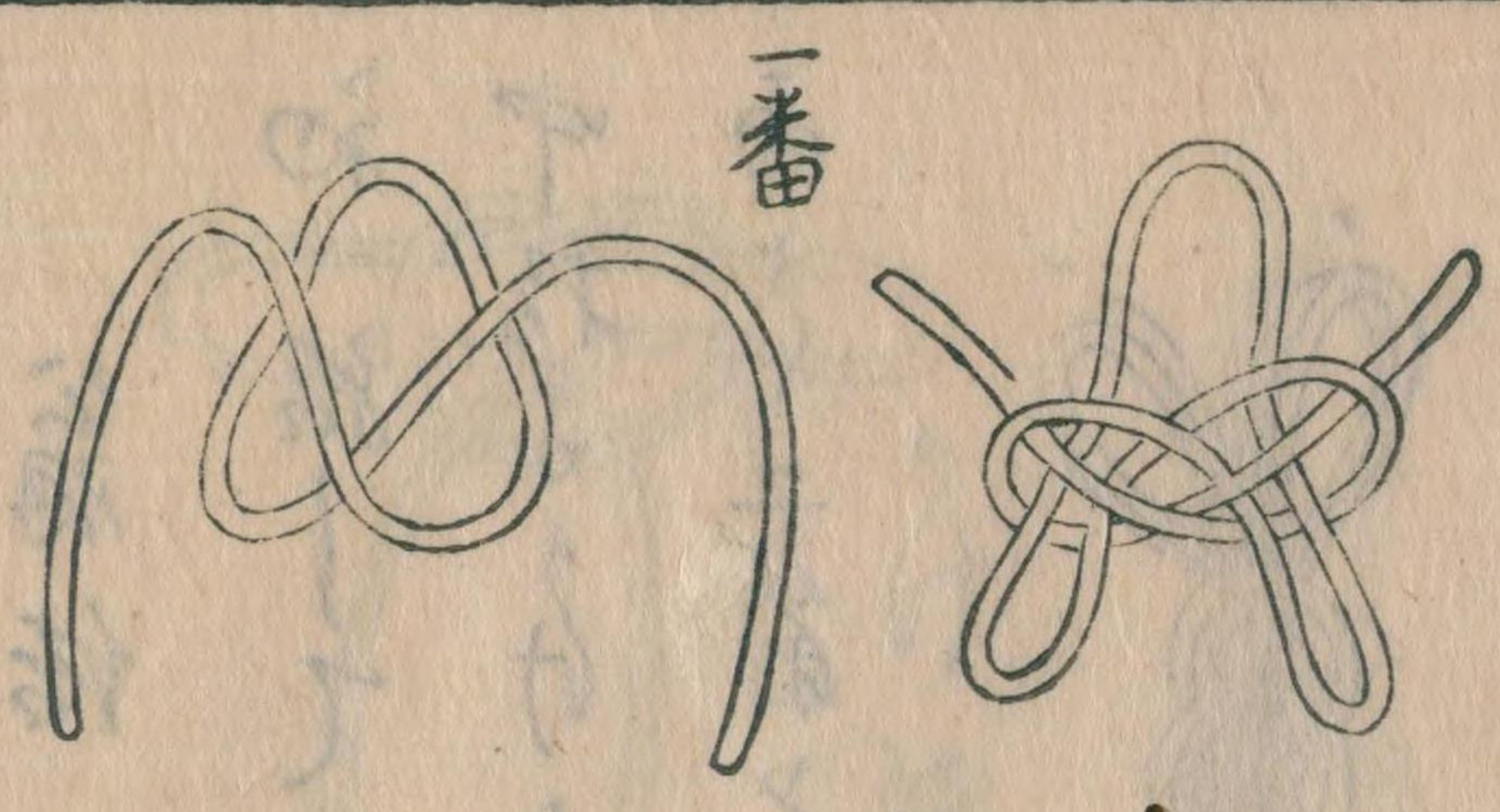
此結を乃を袋なる道具名よ結  
法結よふとこととあまう結中  
用一ふ及  
このまうて  
考へ結入



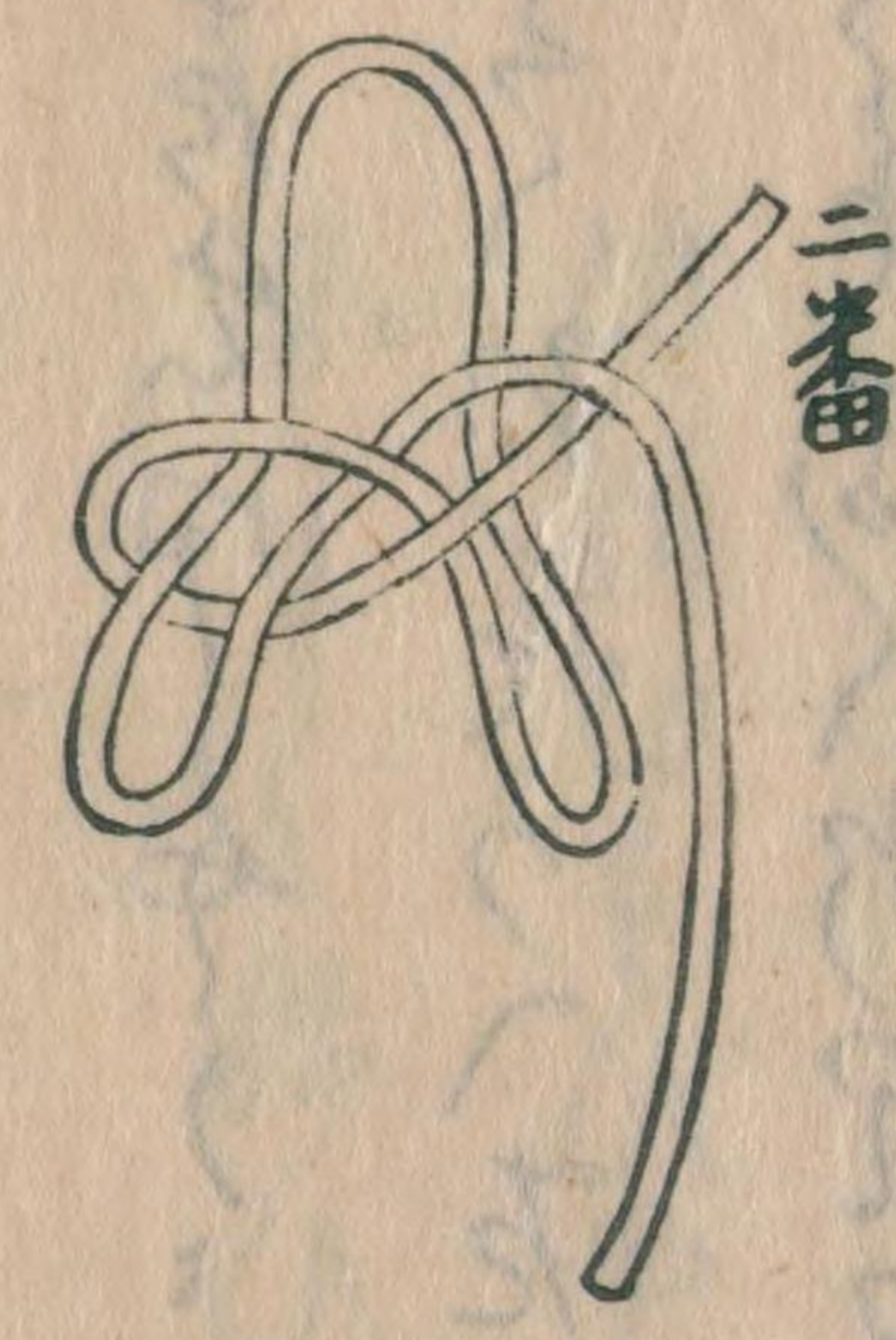




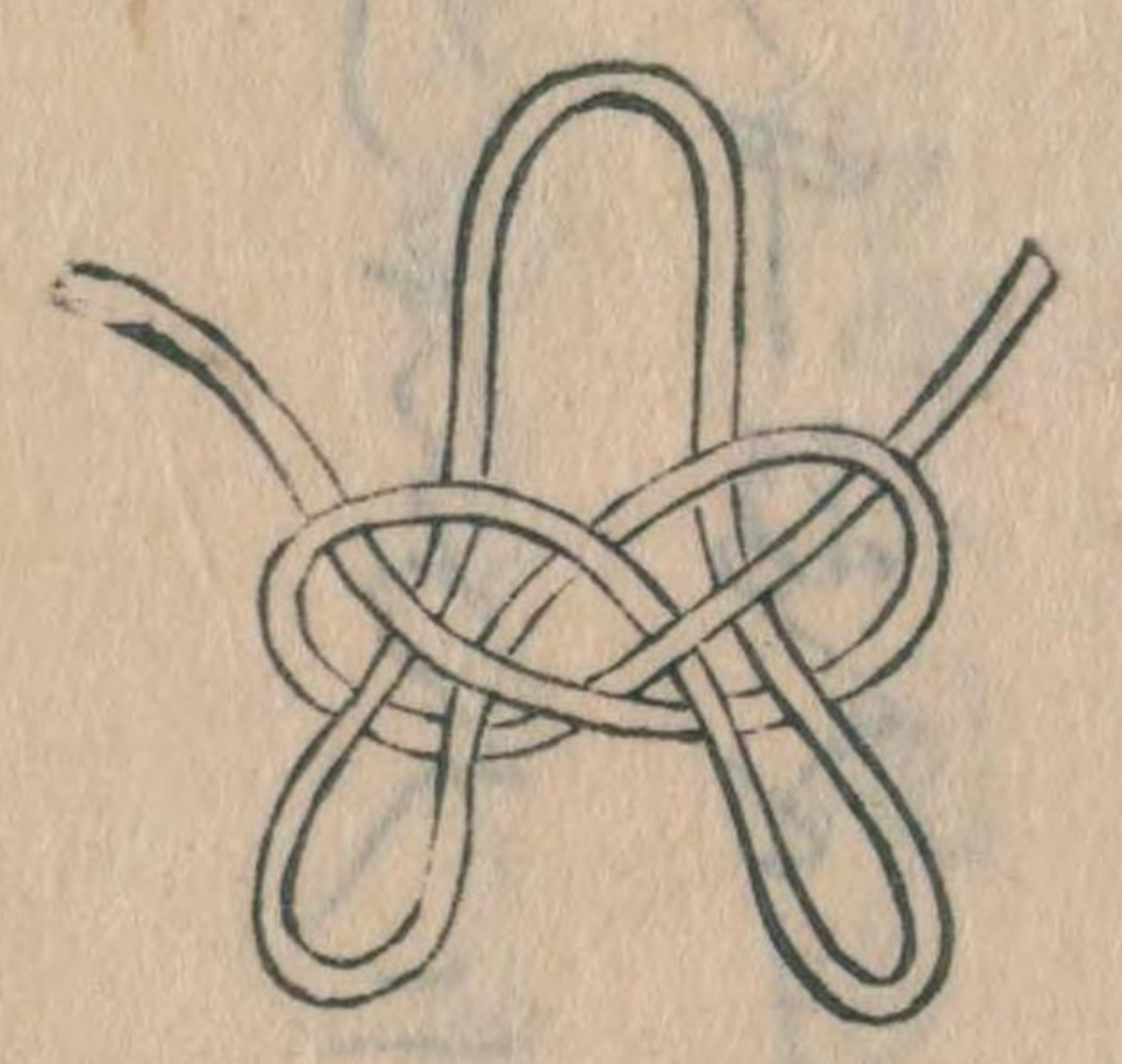




一番



二番

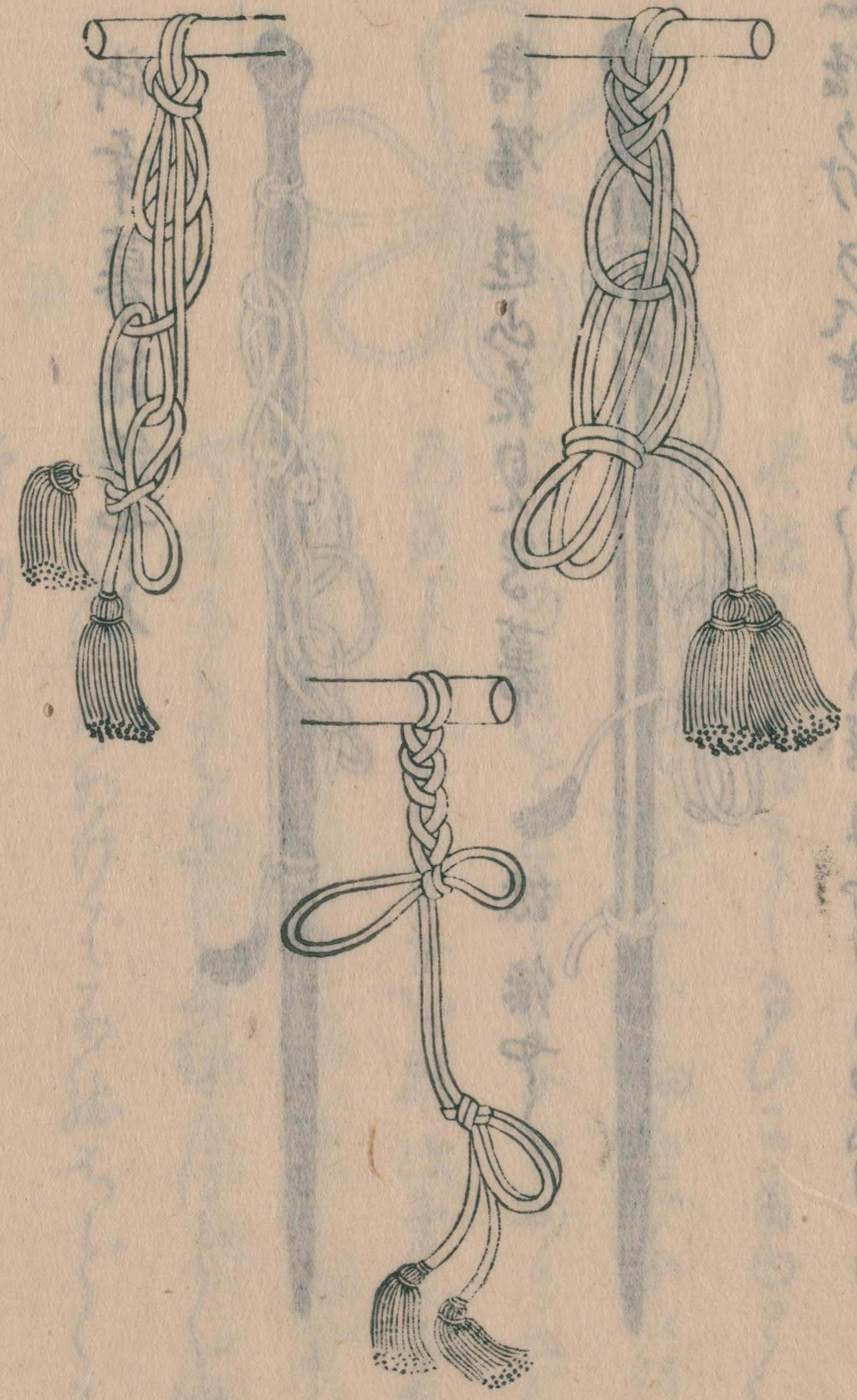


三番

あふ結ては  
まむべー

け結ハ一筋糸よく結うるなり  
長結ハ結時一結しては長糸の二筋  
よて結結やうたの糸より

白ツ糸結



巻く大結結ハ三品

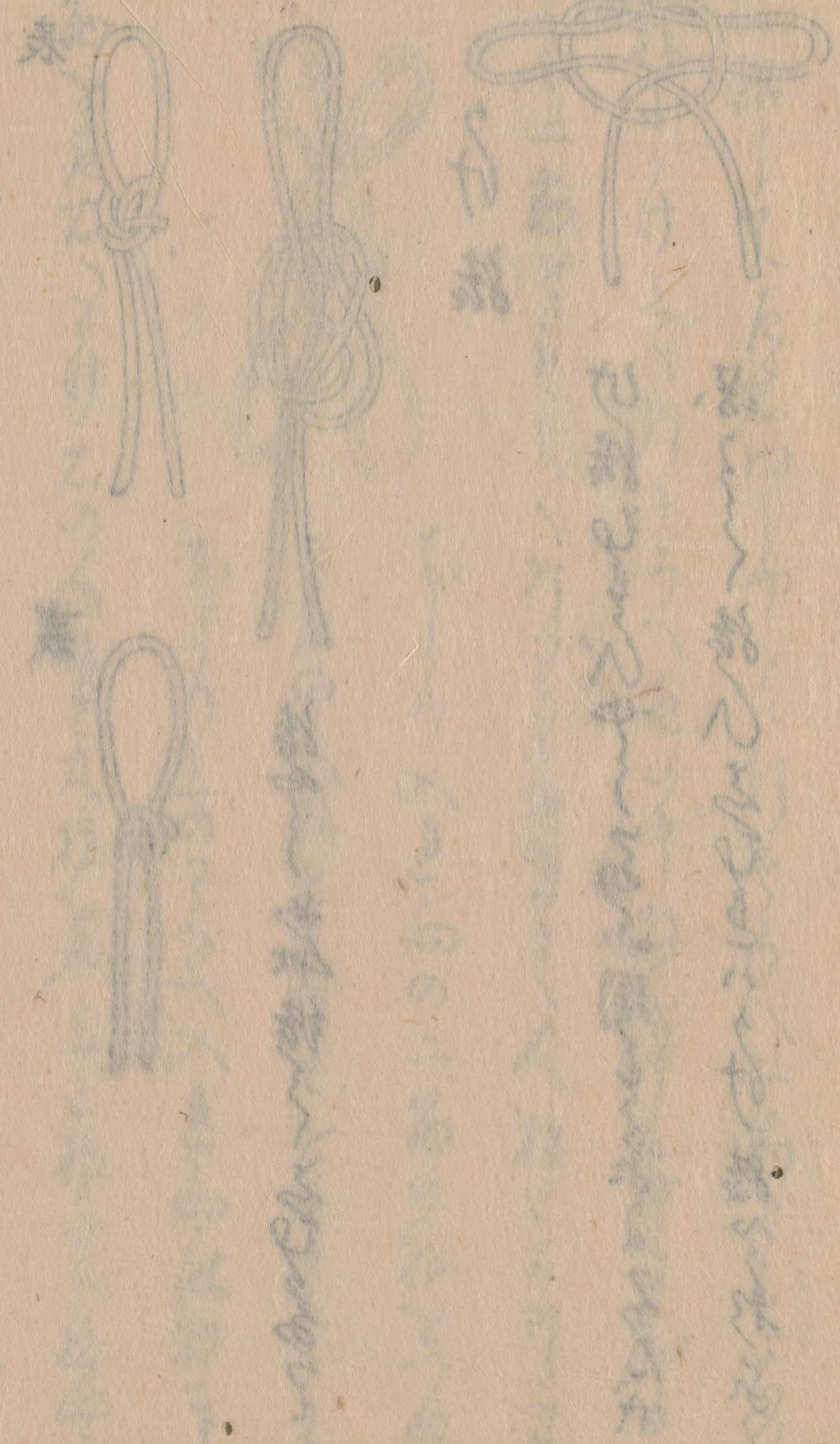








雅遊漫錄卷之六



雅遊漫錄卷之七目錄

投壺

歌貝

韻室イン フタギ

闘茶

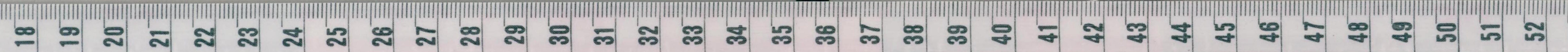
此式青鬘茶話三出

貝合

彈碁タビ

文字鎖ナジ

闘草





雅遊漫錄卷之七目錄終

開茶 開草  
得貝 大宅 龜  
射基  
射壺 貝合

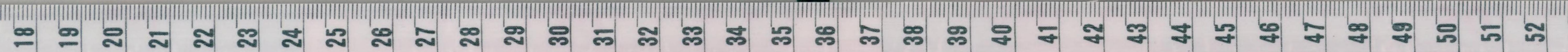
雅遊漫錄卷之七

投壺

禮曰投壺之禮主人奉矢司射奉中使人執壺主人請曰某有枉矢哨壺請以樂賓賓曰子有旨酒嘉肴某既賜矣又重以樂敢辭主人曰枉矢哨壺不足辭也敢固以請賓曰某既賜矣又重以樂敢固辭主人曰枉矢哨壺不足辭也敢固以請賓曰某固辭不得命敢不敬從○賓再拜受主人般還曰辟主人阼階上拜送賓般還曰辟已拜受矢進即兩楹間退反位揖賓就筵司射進度壺間以二矢半反位設中東面執八筭與請

雅遊漫錄卷之七

一









年久々々其法不詳たす司馬公の新式を奉く

司馬温公投壺格範曰投壺可以治心可以修身可以為國可以親人何以言之夫投壺者不使之過亦不使之不及所以為中也不使之偏誠流散所以為正也中正道之根抵也聖人作禮樂修刑政立教化垂典謨凡所施為不啻萬端要在納民心於中正而已觀夫臨壺荷矢之際性無籠密莫不聳發恭謹志存中正雖不能久可以習焉豈非治心之道歟一矢之矢猶一行之虧也豈非修身之道歟兢兢業々謹終如始豈非為國之道歟君子之為之也確然不動其心儼然不改其容未得之

而不悞既得之而不驕小人之為之也俯身引臂技巧取竒其苟得而無愧豈非觀人之道歟由是言之聖人取以為禮宜矣彼博奕者以詭譎相高以殘賊相勝孔子猶曰飽食終日無所用心為之猶賢乎已况投壺者又可鄙畧而輕廢哉古者壺矢之制揖遜之容今雖闕焉然其遺風餘象猶可彷彿也世傳投壺皆以竒雋難得者為右是亦投瓊探闡之類耳非古禮之本意也余今更定新格增損舊圖以精密者為右偶中為下使夫用機徼倖者無所措手焉壺口徑三寸耳徑一寸高一尺實以小豆壺去席二箭半箭十有二枚長二尺有四

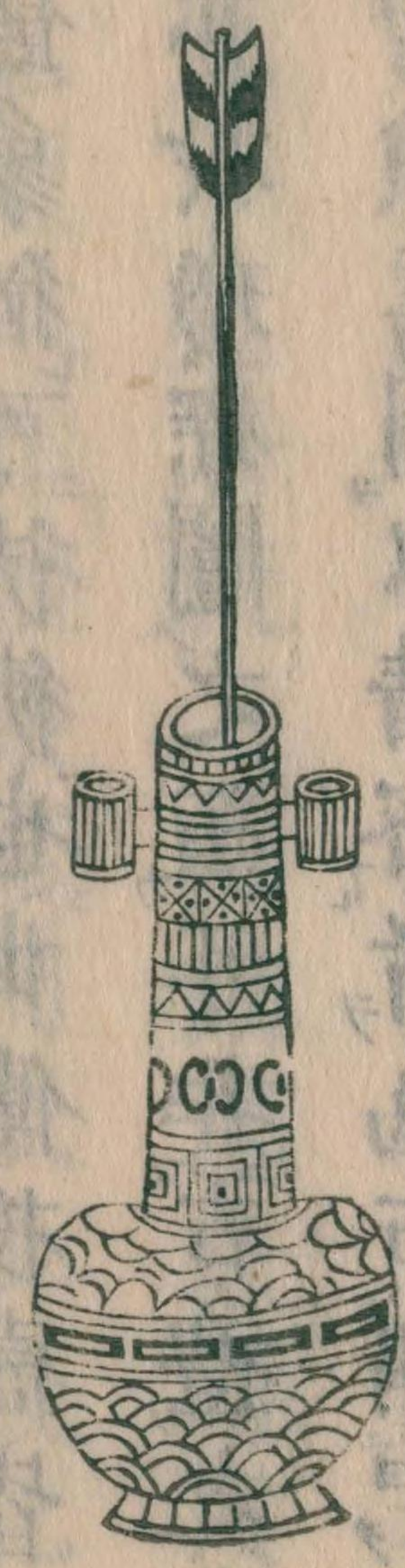




雅遊漫録卷之三

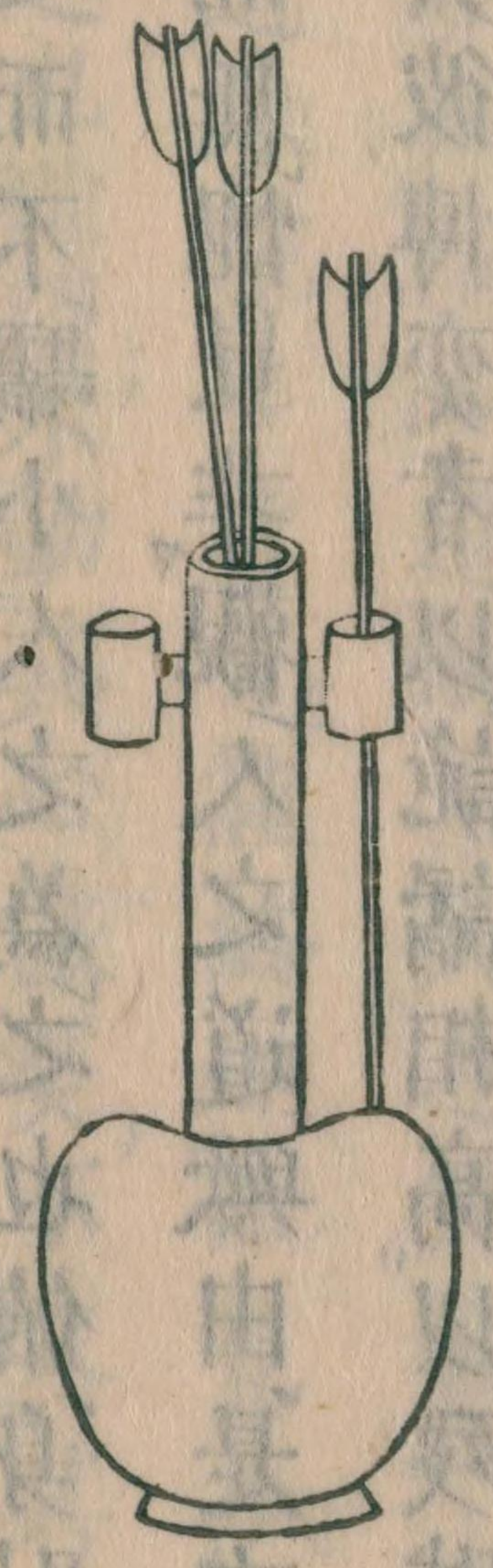
以全壺不失者為賢苟不能全則積筭先滿百二十者  
勝後者負俱滿則餘筭多者勝少者負列圖以釋其意  
焉

有初



首此箭盡之中氣と有初とくくことと常は是れを終る  
の意とくくことと有り

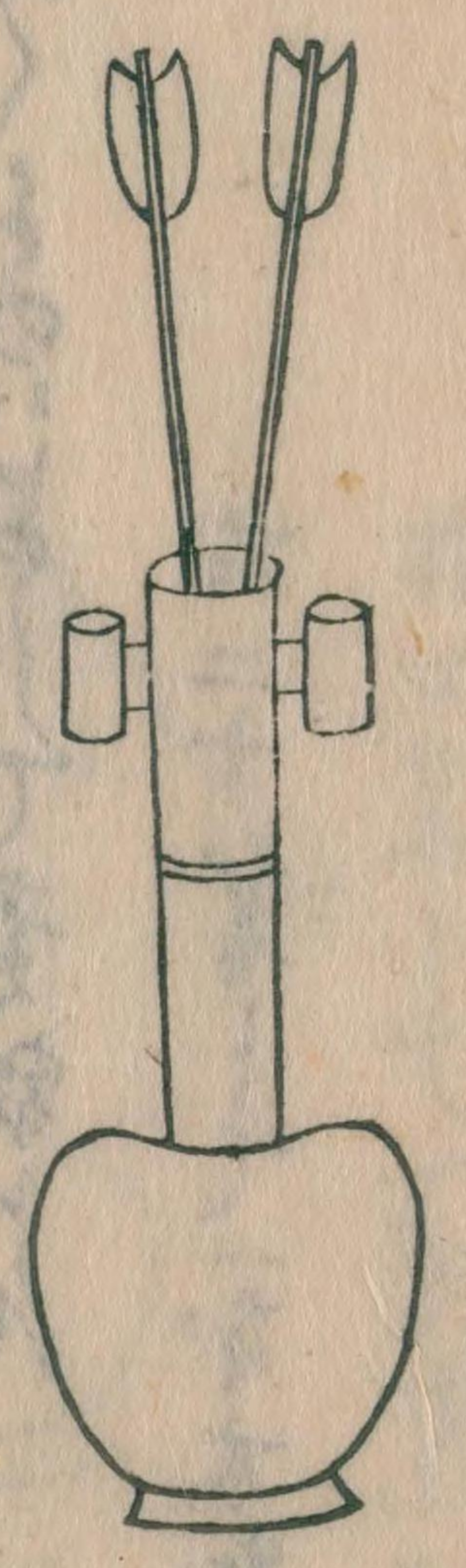
貫耳



而不利野之而不...

耳ハハより小一缺とて中ハハいふく積とてハハハ  
周くきん

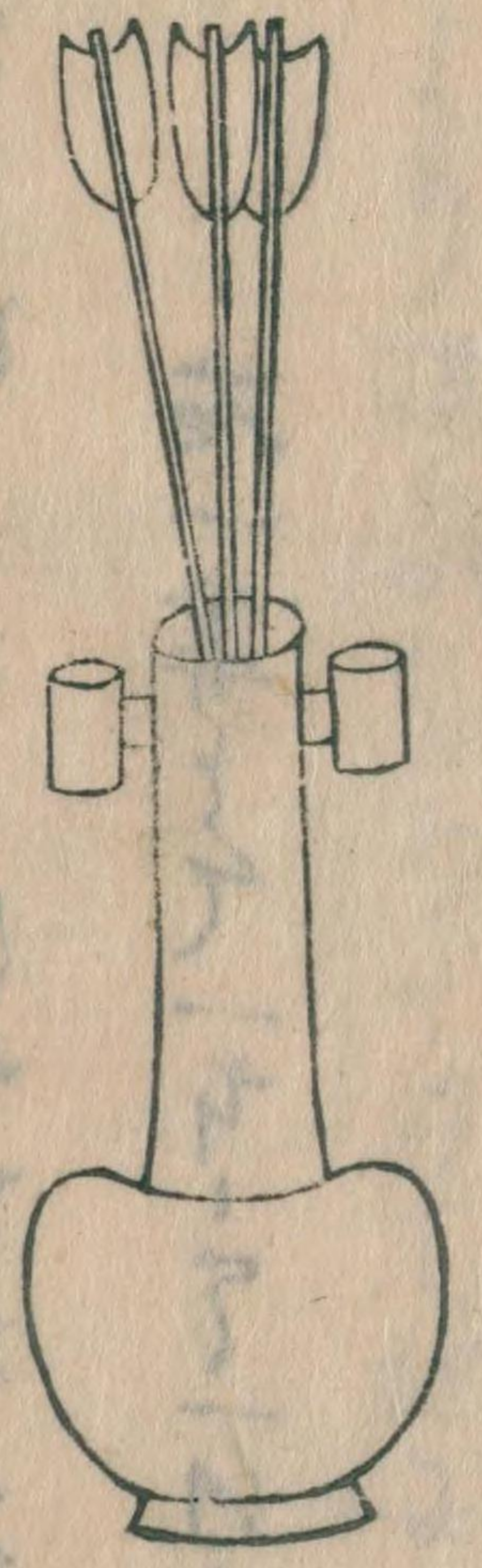
連中



者二番目の筭よりつてきく石給とのと

右五筭とくく五ツとあり

散筭



雅遊漫録卷之三

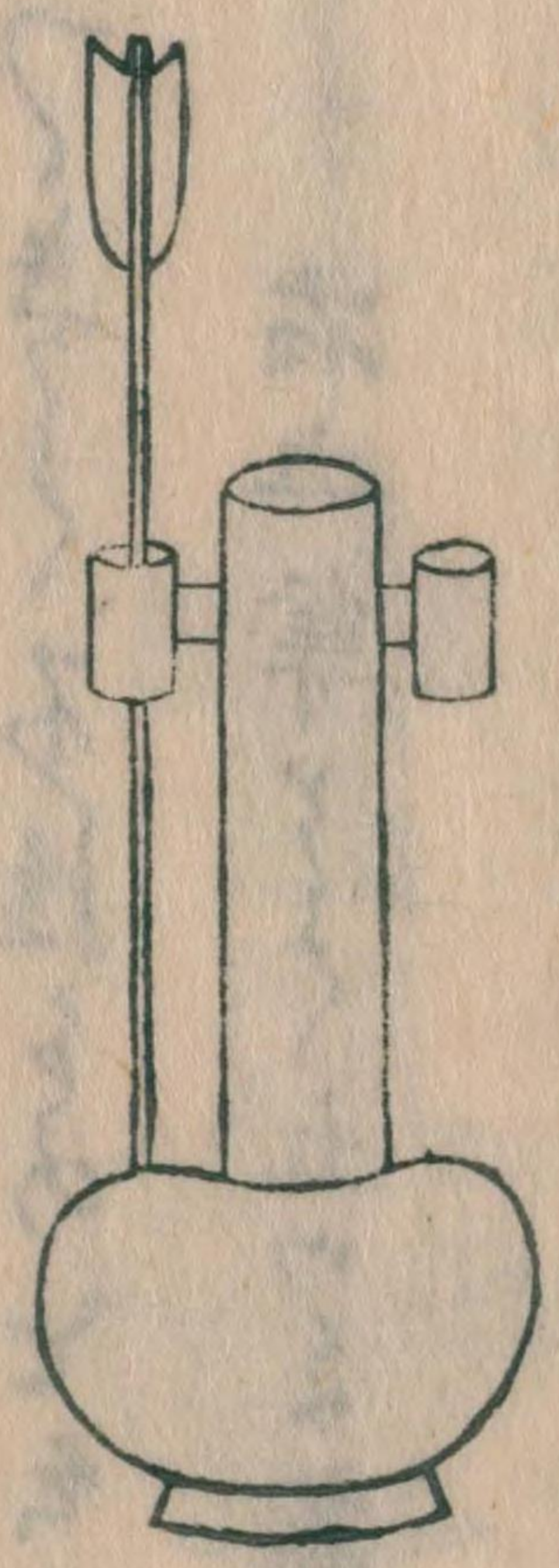
四





第一等中一尺の管を以て管の中を教管とす

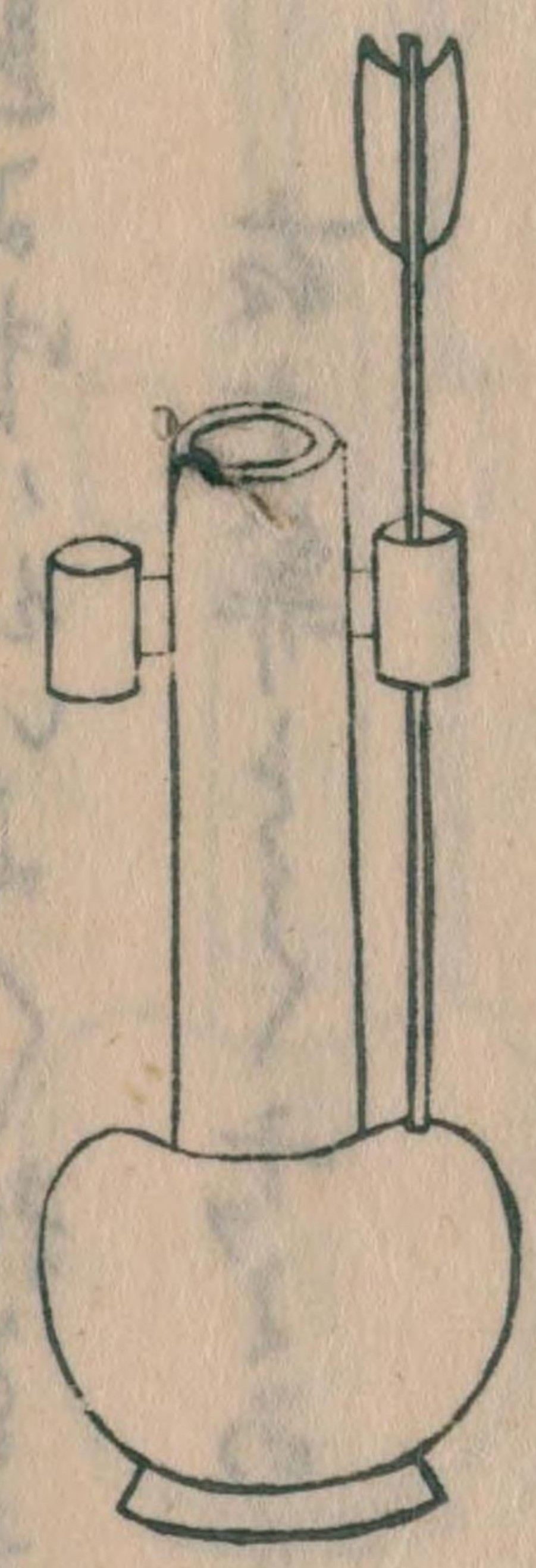
初有貫耳



右一管として一尺一寸の管を以て

和管耳として一尺一寸の管を以て

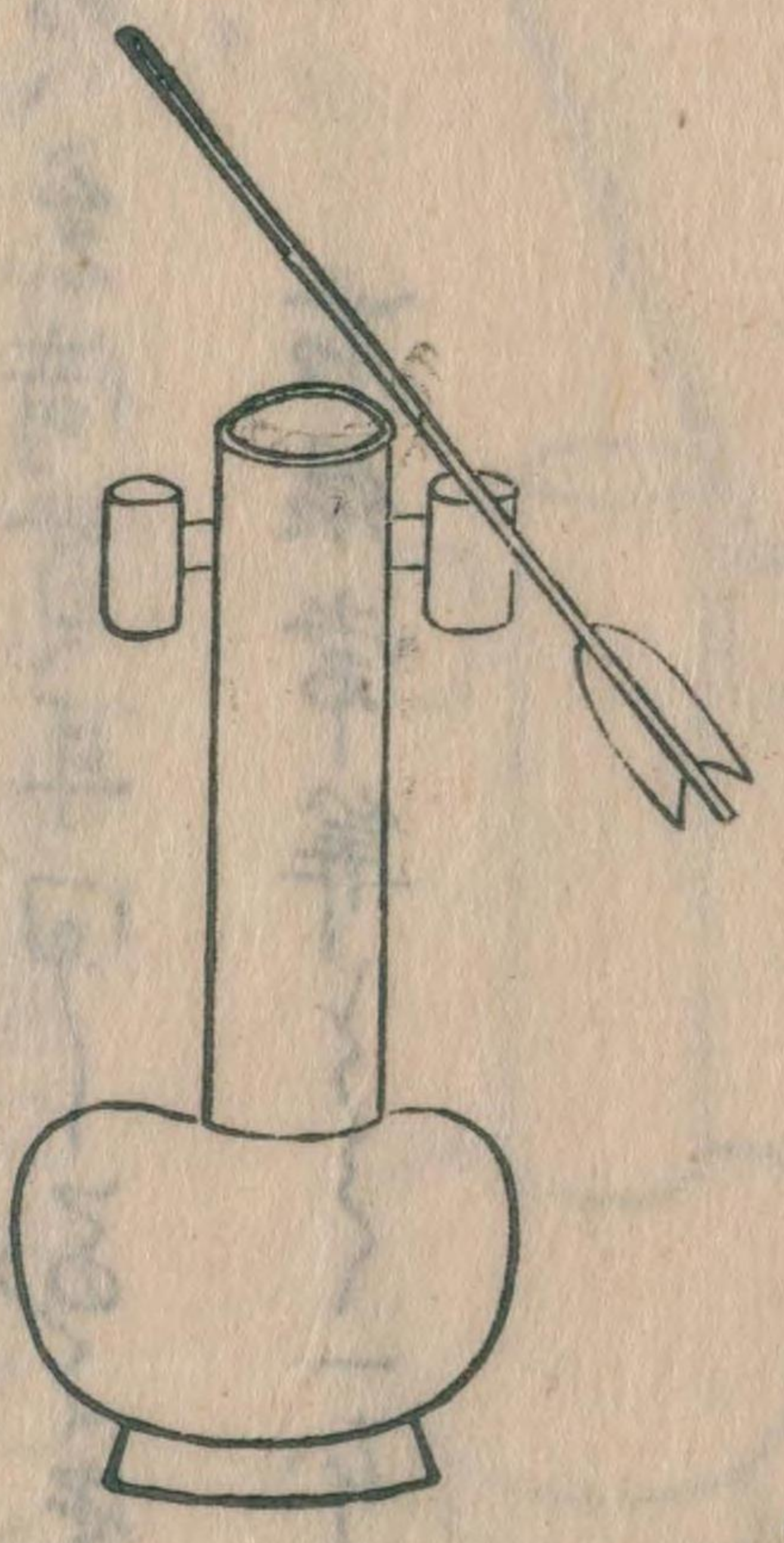
連中貫耳



右二十管として一尺一寸の管を以て

この和管第二の管のふさぎを以て貫耳のものとす  
一とぞを爲法とて今貴をかくし

横耳



右一管として一尺一寸の管を以て

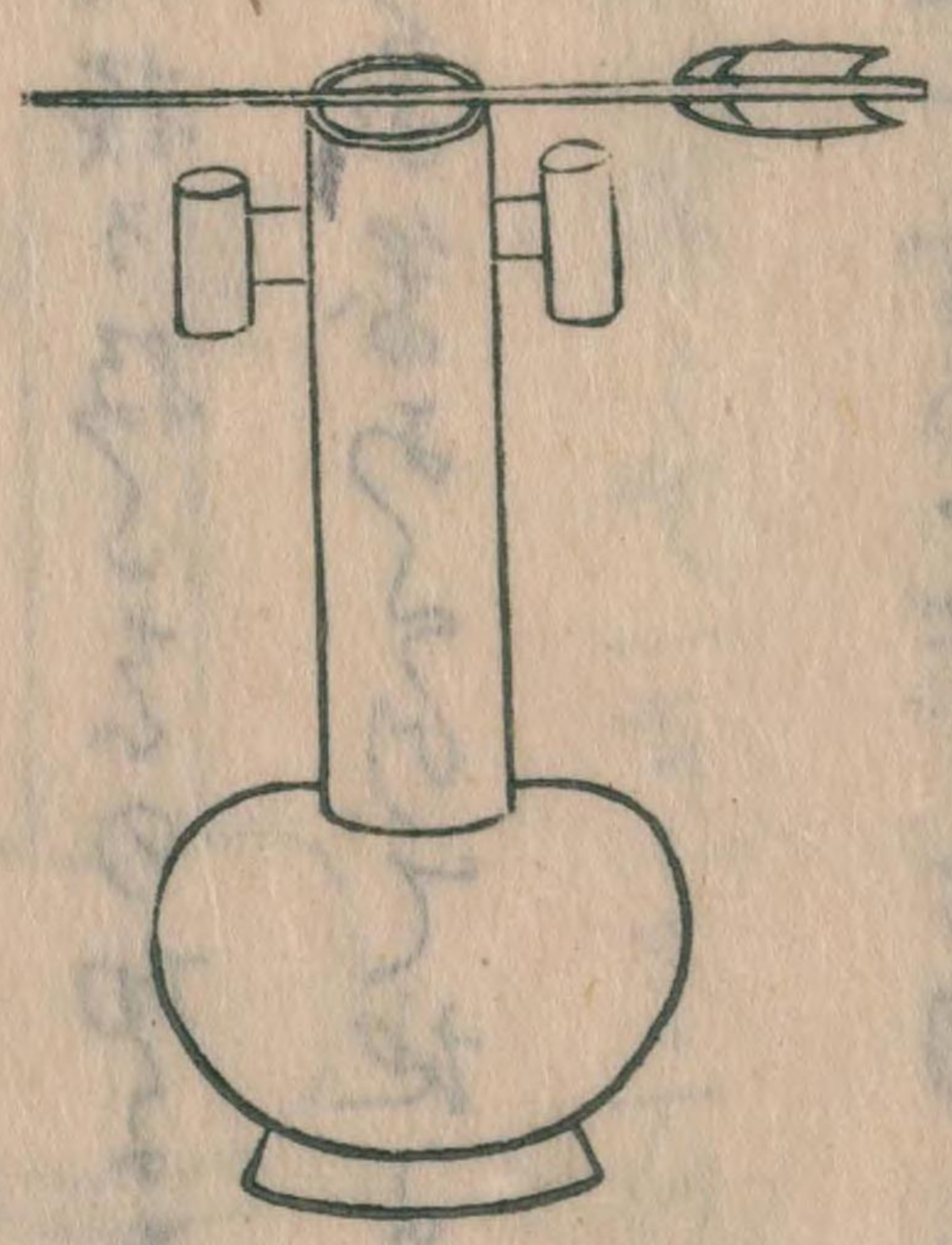
管耳の上より加へ偶然として横耳の如きもの  
よのよの不意ありては横管ありて地よとらむ  
の子すもたれど

右一尺の管を以て一尺一寸の管を以て





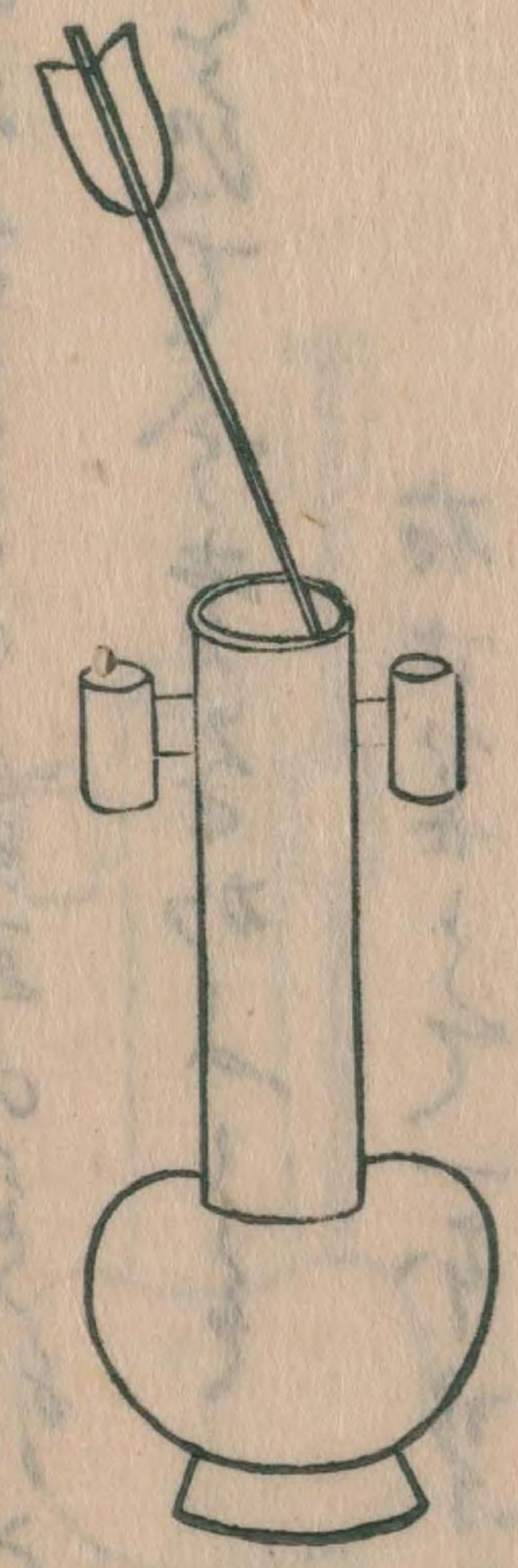
横壺 ワケコ



箭壺の系換ふ加りものハ左倚貫耳同ーある者あり

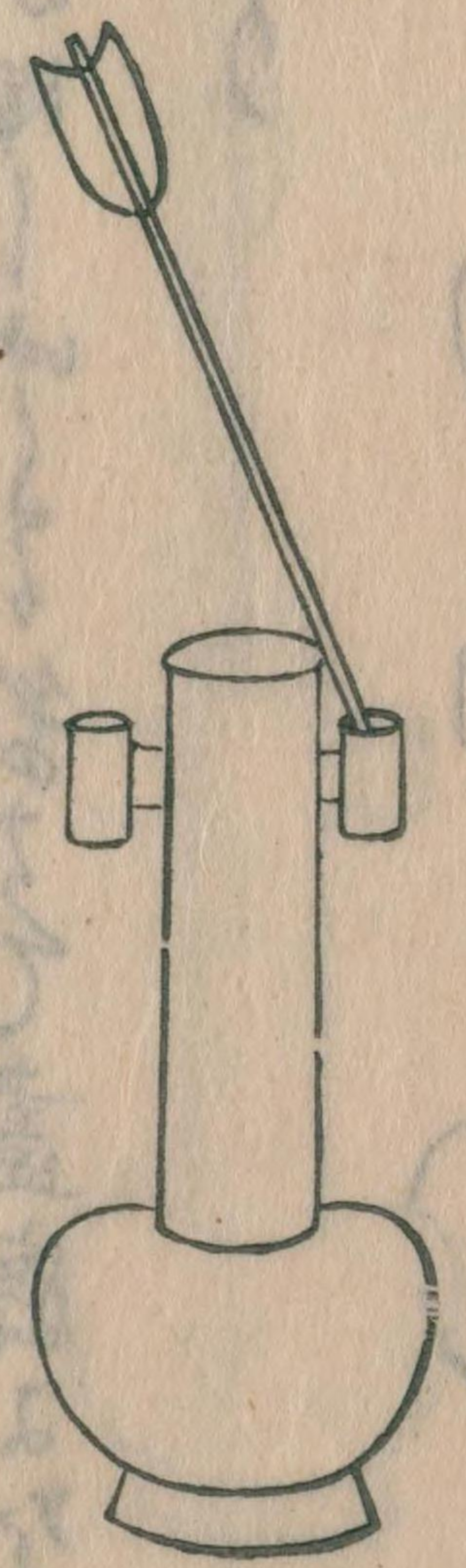
右依常筆とく一本つゝと壺

倚竿 イカン



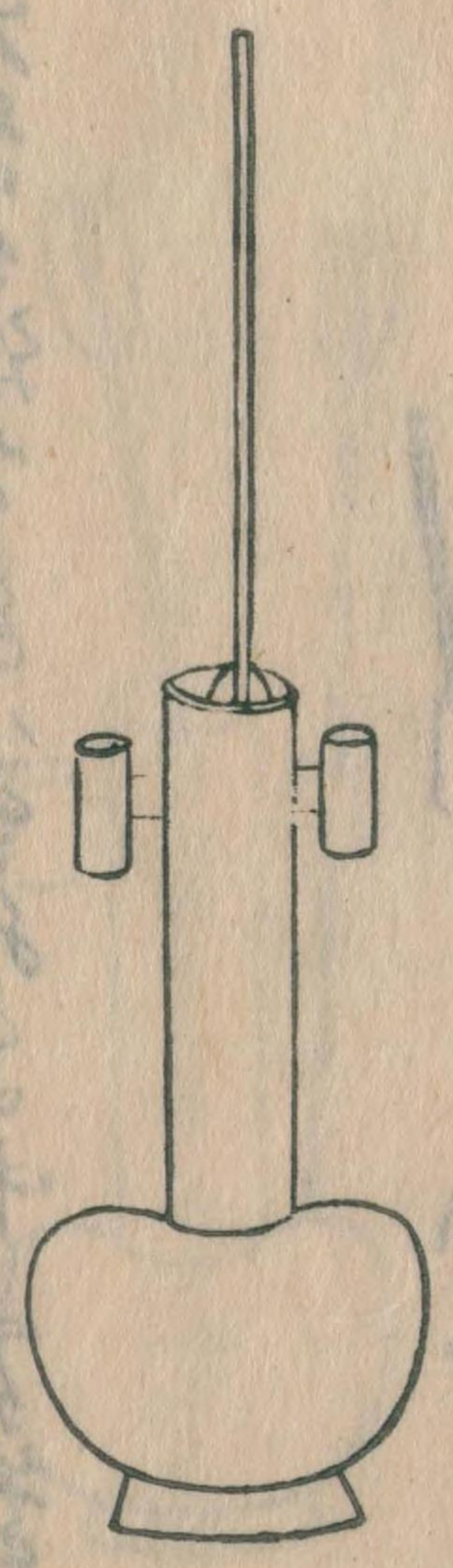
箭壺の系斜倚とくと全壺の者ハゆるして教ふのあり  
よりなる箭のあり地ハ墮ハ不中か同ー

耳倚竿 ジイカン



箭耳ハ斜倚とく中と云えりも全壺の時ハ一本の箭ふ  
より倚竿か同ー全壺さうざれハ箭ふみど

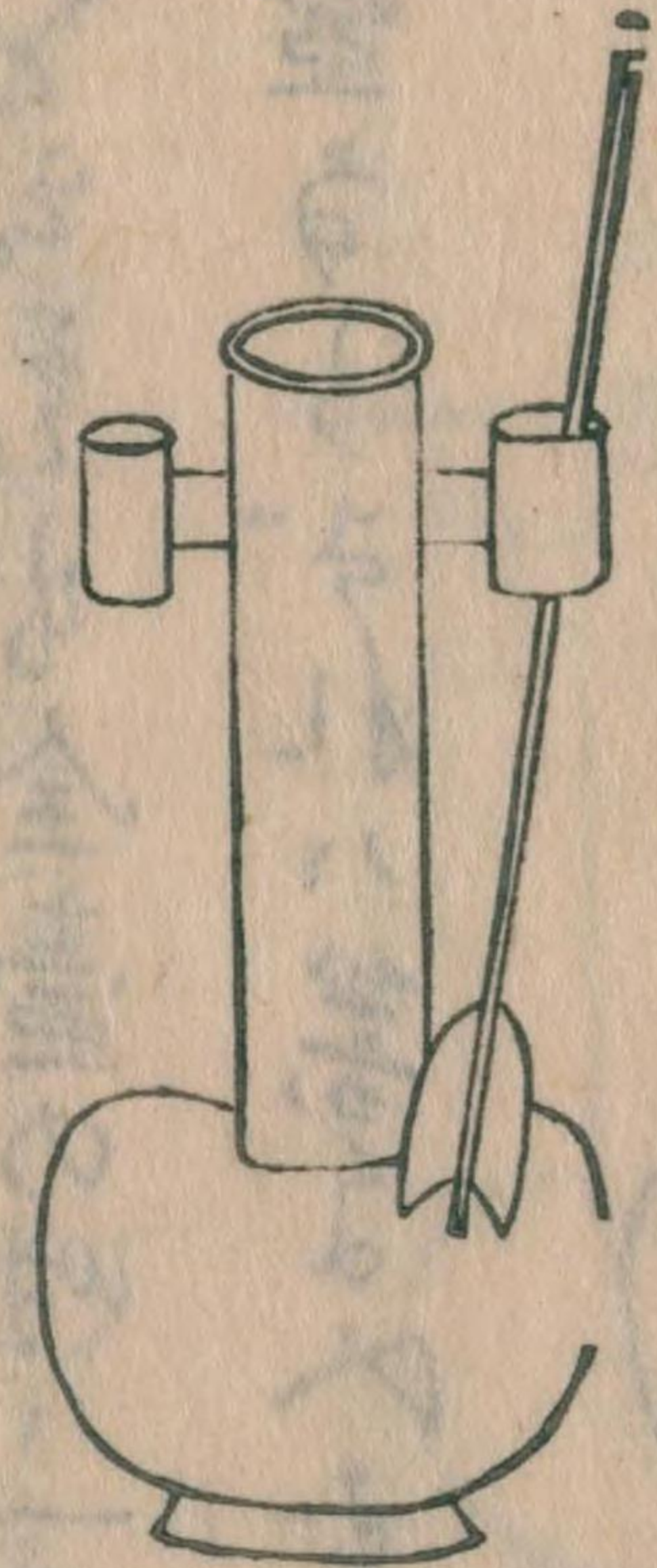
倒竿 タウカン





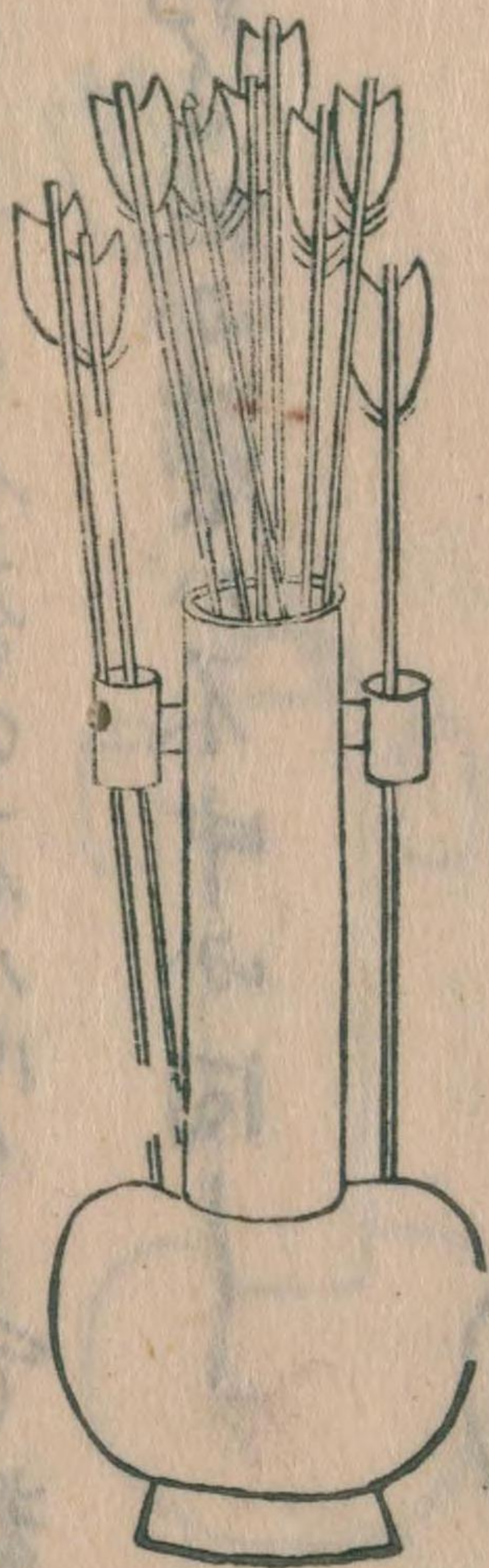
箭倒し中と云ふは、深さのハ、その中へ中へ、その箭の箭まで、  
倒し中なり

倒耳 タウジ



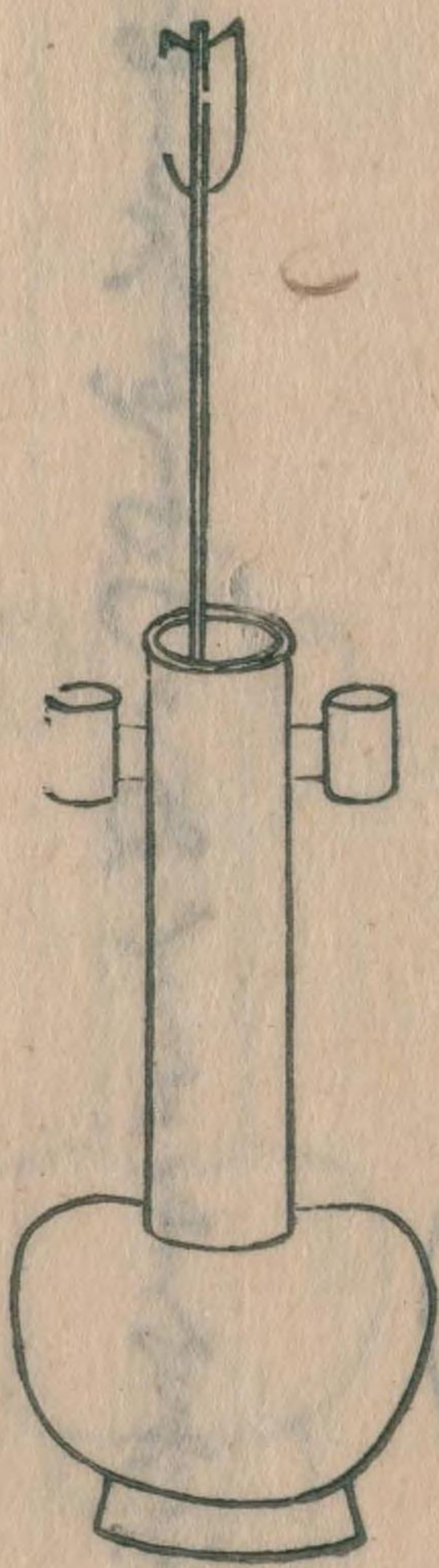
右ハ倒竿此罪小同、中へ中へ、其まで盡廢なるなり、  
倒し中なり

全壺 センコ



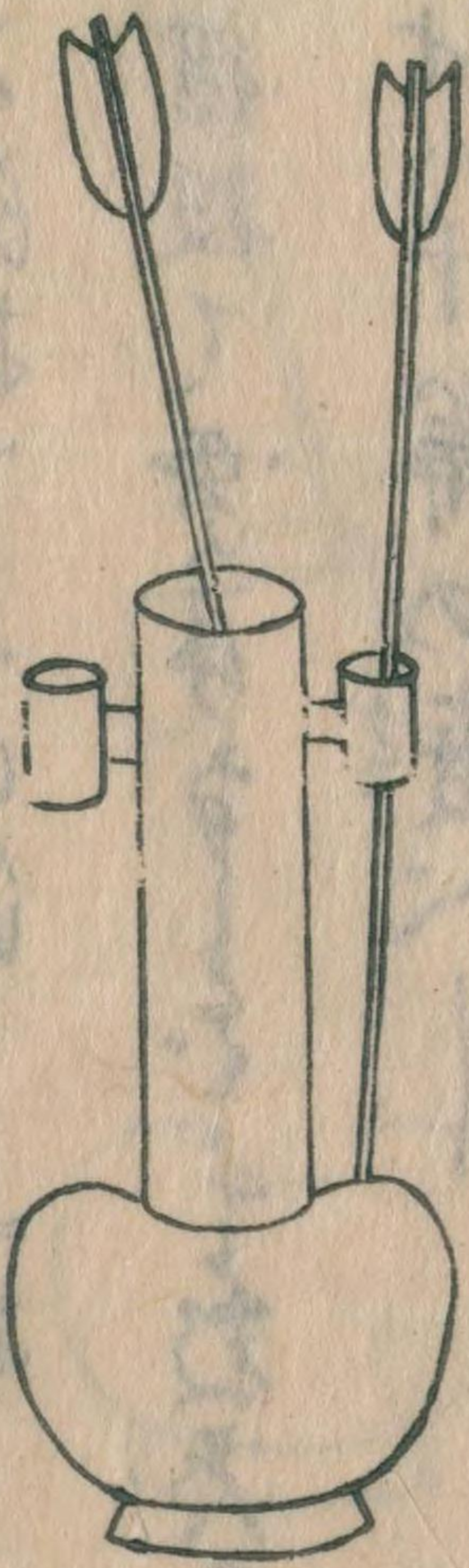
全壺ハ十二寸と、皆中へ中へ、其まで盡廢なるなり、  
其人全壺あり、其ハ此壺の方、故に其を、  
有終 イウレウ

有終 イウレウ



右ハ十二寸目の、其の中へ中へ、其まで盡廢なるなり、  
右ハ十二寸、其の中へ中へ、其まで盡廢なるなり、

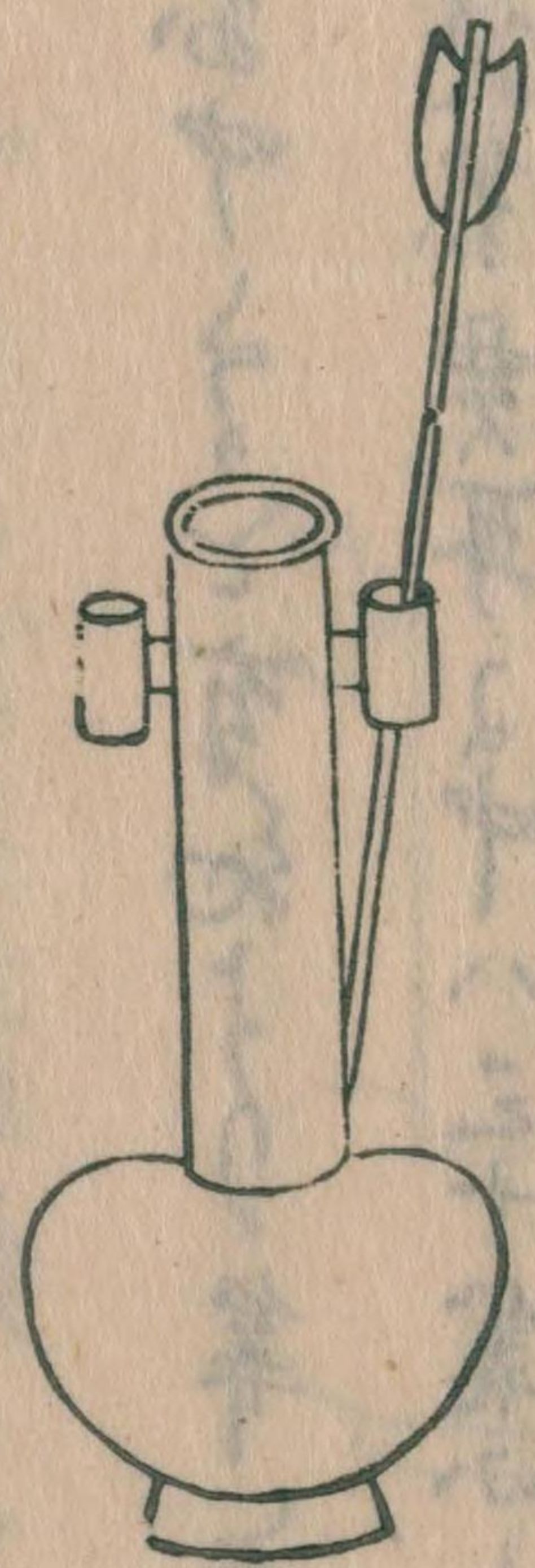
驍箭 ケウセン





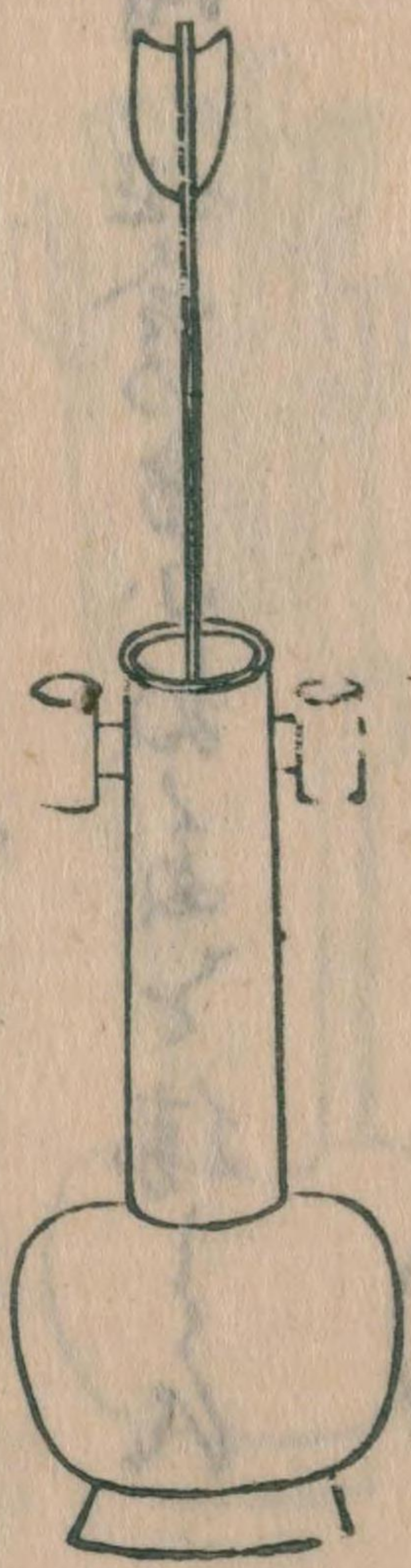
トビカヘリヲドリイデ  
こゝハ投一筋激及蹴捷て再び得く又投一筋の中へ。  
こゝハ又々以若投て身身うゝをそ投たのせ身入一  
後投して不中り此ハ十の廢ズー

タイケ  
帯劔



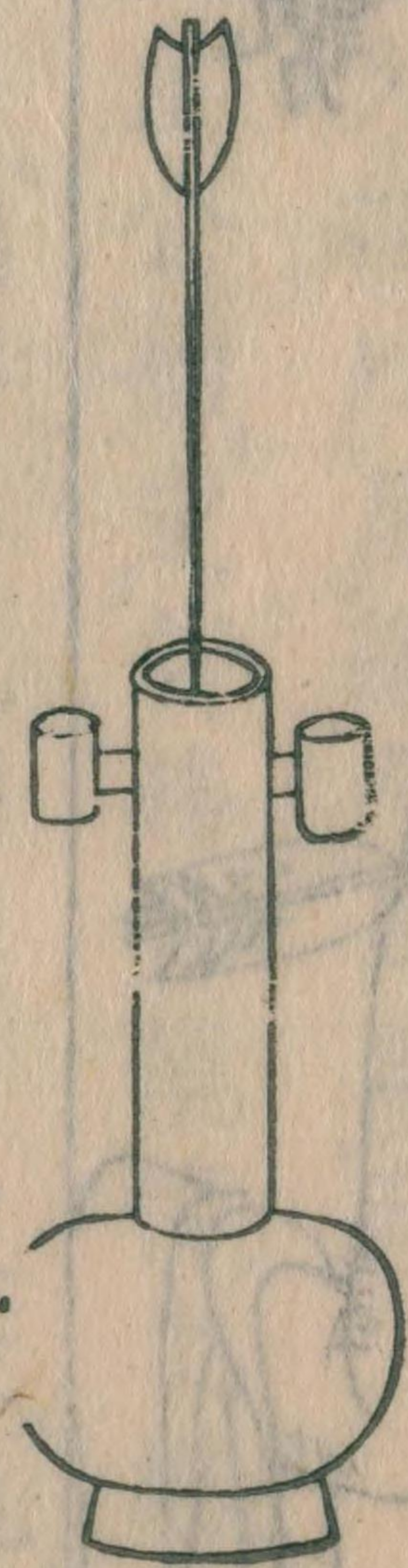
これハ貫耳他ふやんあつうぬとそをたふのせ

レウシユ  
龍首



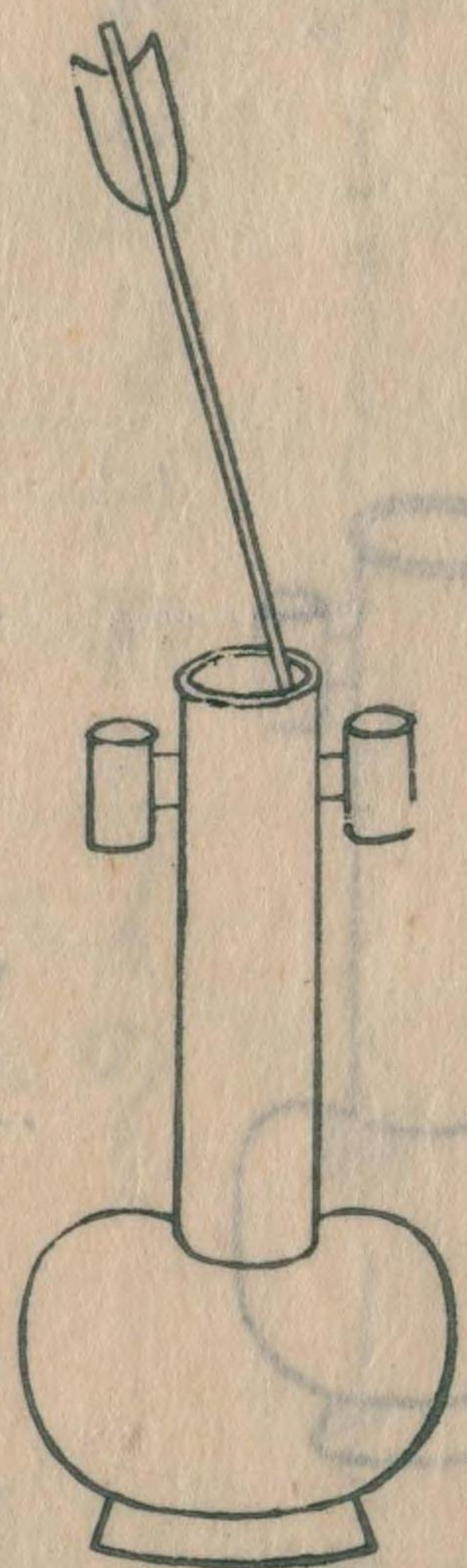
イガミ  
倚竿て申一筋吉正面よ向ふものとを高く賣して十八  
又高しうと今ハ倚竿の向一甚筆ふれを

レウビ  
龍尾



倚竿て糸の飛ぶく己よ向ふとを高く賣ハ十五竿とせしうと今  
ハ倚竿の向一く筆の入り

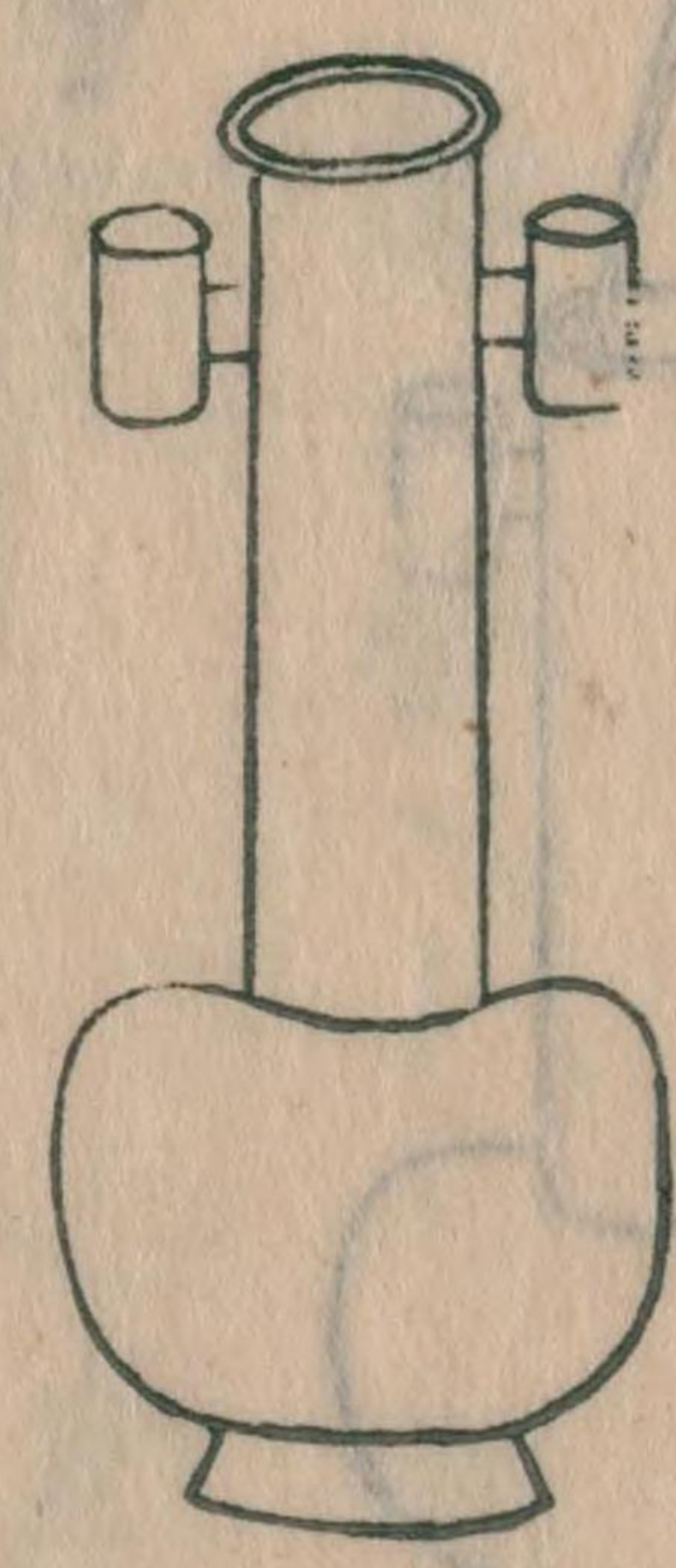
ラウコ  
浪壺





口と旋て倚竿とるるを云々高八十四筭と云々今倚竿と云々  
筭ふいふ云々

ハヤコ  
敗壺



是ハ十二系とも不中と云々ある人故壺ありと能く云々筭また  
と縁と定む  
右ハ云々負しと云々あり

投矢手勢



投壺舊有圖大抵以用機得雋為右

先正司馬文正公始定新格付僥倖之勝盖其意欲歸

之正也夫博奕猶賢乎已則是書之設孰謂無補哉紹

興丁卯孟冬都陽洪尊識

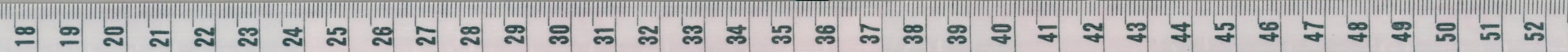
右投壺の事司馬公此定る所のと云々と撰く如解と云々

兎も此後ふ初るまうく是と云々解して蓋世と云々と

ぬむ者とり初るる成歎と云々の

雅遊漫録

七

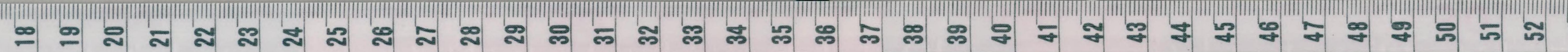






日本酒金巻之七

七













古け威ありく事ははらり終り去れども程もあつた  
こまふはらりく世の又ももつたり今もやたふあつ  
けり又ももつたりせんくさつ方より後師ふ作せく彈  
奏の國をうせらるるもあつたりつてくさる國ありてそ  
と画くもりつたりも換りありくの後もひくも  
うつてく世もあつたりむ今のや兒の終ぶるもくさくも彈  
碁はき法をばへ

西京雜記曰成帝蹴鞠羣臣以蹴鞠為勞體非至尊所  
宜帝曰朕好之可擇似而不勞者奏之家君作彈碁以  
獻帝大悦賜青羔裘紫絲履服以朝覲  
按事物紺珠為漢武帝事家君

指劉向

潛確類書曰彈碁二人對局黑白碁各八枚先列碁相  
當下呼上擊之世說彈碁始自魏宮內妝奩戲也文帝  
於此戲特妙用手巾拂之無不中有客自曰能帝使為  
之客著葛角巾低頭拂碁妙踰于帝  
古今詩話求食註曰彈碁有譜一卷皆唐賢所為碁局  
方二尺中心高如覆盆其顛為小壺四角微起  
此餘徐廣彈碁經劉孝孫事原蜀父谷備忘小抄致虛雜俎黃一正事  
物紺珠孫盛魏春秋等書各論彈碁不遺枚舉今爰省  
畧矣  
枚多不黑白碁各六枚一說八枚合十二枚二人向合對局













よハ古ゆとくハ絶化——ハハ韻律の熟をそとをえとよハ古人  
のゆれをそとをえとよハ韻律の熟をそとをえとよハ古人

文字鎖

大抵古歌の辭——て句の終りの文字とあつて次の句は此の文字  
こはばら半ありはをそとをえとよハ韻律の熟をそとをえとよハ古人  
源氏乃きづれてやけい——は ころけきま——相愛よ  
とほよそとく——常本を けい——ねふれくを聲や  
やき——ふららの夕ふは ころけきま——のららぐ——  
よはよ末揃むの香け ころけきま——のららぐ——

うきといとひ——花の宴 ころけきま——のららぐ——  
柳のえく——とく——あもハ ころけきま——のららぐ——  
須磨乃——みよとく——あもハ ころけきま——のららぐ——  
このめ——あやせ ころけきま——のららぐ——  
みよふ園居れかきうつし ころけきま——のららぐ——  
寄よ姫とぬまのくせ色 ころけきま——のららぐ——  
世ハ横乃これ 乃 寂 ころけきま——のららぐ——  
かきほく——のむむうつし ころけきま——のららぐ——  
もく——あもハ ころけきま——のららぐ——  
そはそり——たたえや ころけきま——のららぐ——

三十一

三十一





神々の風くくぬきまひ それやほくくふらま 折梅う枝のおほみやと ちよとてほくくあ葉を 横笛入糸とおとくろや くくくさく霧秋ふく 幻乃世れりともちやく きくくあも白く入無知 ぬく入るくくく行川や のうきくそふく推うか	口くまくくくぬは幸は まれの枝まワくくく ちよとてほくくあ葉を りとの梅本ちくくれ葉 扇くは枝ま葉とくく けはくくくくくくく きくくあも白く入無知 ちよとてほくくあ葉を さくくあも白く入無知 のうきくそふく推うか
--	---

ちよとてほくくあ葉を  
 りとの梅本ちくくれ葉  
 扇くは枝ま葉とくく  
 けはくくくくくくく  
 きくくあも白く入無知  
 ちよとてほくくあ葉を  
 さくくあも白く入無知  
 のうきくそふく推うか

雅遊漫録卷之七

〇十二





況字にうけくぼくつていそ例左のい  
秋の田共うりふの爲乃管成あしみ。

うり衣もは露くしめきつて。

ほくも縁のいひよりおつたこれの川

あそはさうく倒しちりあふ。

うきうきいほちあぬ神たぢつもの紙

うきうき終ぬいあきうきちりちり。

うきうきのちをせううせいうきうり

くのうきうきうきうきうきうきうき

ぶのうきうきうきうきうきうきうき

あやうしと人の同。うきうき

うきうきうきあともむさうのいハ女事ふ古事と時化

うきうきうきあふけしうきうきうきうきとちりちり

ちりちりうきうきうきうき

闘草

荆楚歳時記曰五月五日踏百草今人又有闘百草之

戲歐詩云共闘今朝勝盈檐百草香章簡公帖子五賞

関瑞英百草闘香茗又云五日看花憐並葉今朝闘草

得宜男これうきうきうきうきと闘しむ例あり

ふ法書うきうきうきうきうきうきうき

雅遊漫録卷之二





先帝より一儿とをたたむる例ありて是等草草の百歳  
 とくく一持物く先たより言簡とをさむたよりと回  
 事をあし對ひ又存より萱<sup>クニガサ</sup>野とあしてりさくあし時  
 たよりと也又口をとあしと答入るひさるふ<sup>アチサ</sup>  
 けたるに方負よてはく又たたよりあ人あし業<sup>アチサ</sup>務を  
 とあし九より重時又向よりとけむとあして幾いけ  
 後負あしけしお帝の人あしけしけしたはゆ程の給ふ  
 はゆ程の負と定む事此とくべしむハ終よはまがの事  
 事しむらくし樂むべし海さの海ハまの事しむらくし

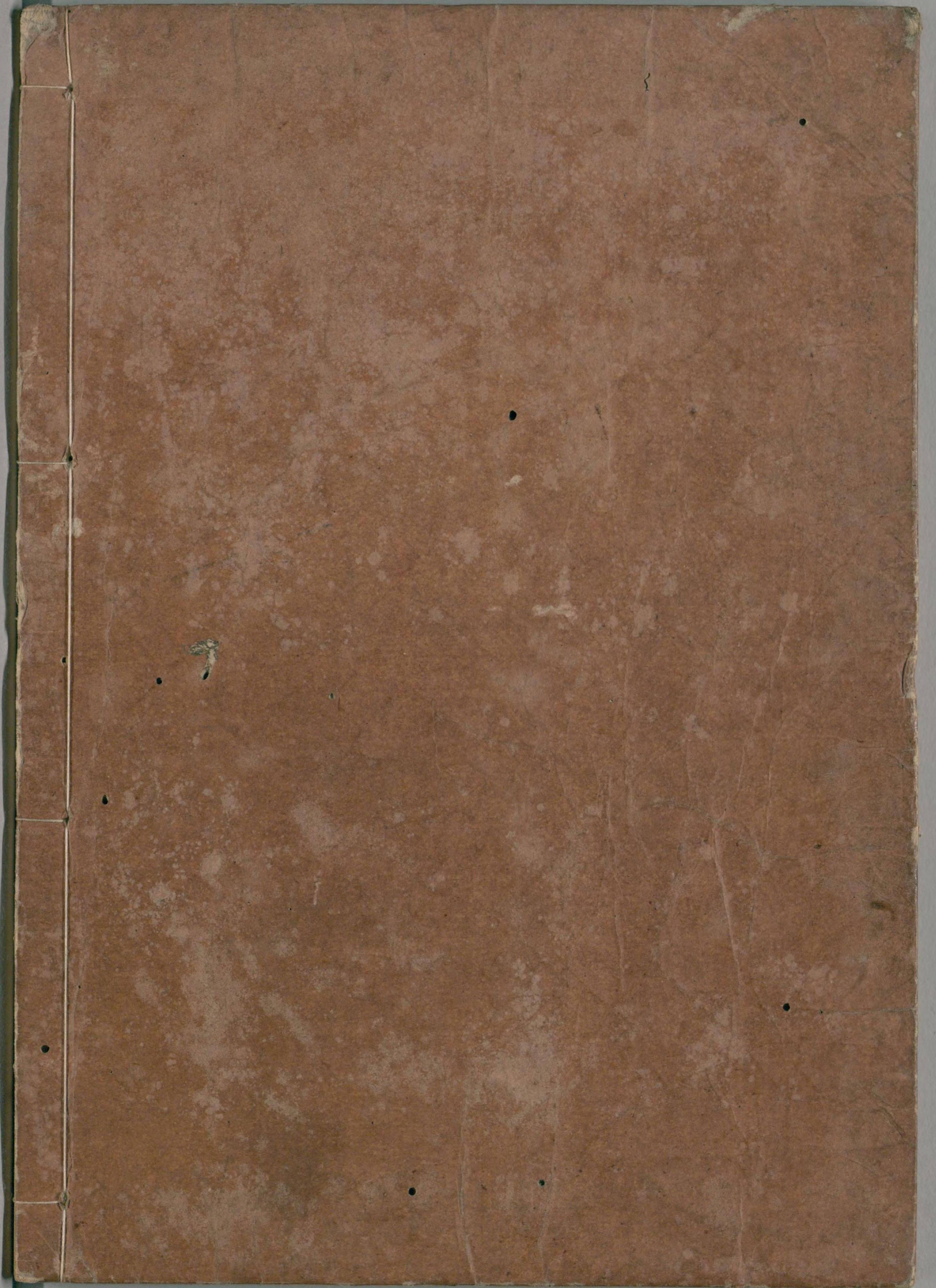
雅遊漫録卷之七大尾

特 7  
 332

544  
 414







国立国会図書館 タイトル『雅遊漫録』 請求記号 特7-332

ガラス使用